

金沢大学留学生センター



外部評価報告書 2004

INTERNATIONAL STUDENT CENTER
KANAZAWA UNIVERSITY

外部評価全体報告書 2003.12.6



石原多賀子委員



尾崎明人委員長



古城紀雄委員



越前谷明子委員



細川英雄委員



特別講演会

2003.12.12



チャールズ井上委員



中山謙二留学生センター長



目 次

巻 頭 言	金沢大学留学生センター長 中山 謙二	1
I 外部評価実施までの経過		2
II 外部評価委員名簿		4
III 外部評価のために参考とした資料		5
IV 外部評価委員による報告		7
1 はじめに		7
2 外部評価の過程		7
3 評価結果のとりまとめ		8
4 評価結果		
留学生センター全体に関連する評価及び意見		9
評価委員の専門分野に関する詳細な評価及び意見		19
5 おわりに		30
6 外部評価報告会記録		
金沢大学留学生センター外部評価全体報告会		31
(平成 15 年 12 月 6 日開催)		
金沢大学留学生センター外部評価全体報告会		67
(平成 15 年 12 月 12 日開催)		
編集後記	金沢大学留学生センター教授 三浦 香苗	88

巻 頭 言

金沢大学留学生センターは、1995 年（平成 7 年）4 月に学内共同教育研究施設として設置された。当初は、前身の「留学生教育センター」の事業を引き継いで、全学の留学生向け日本語教育と修学・生活上の相談指導を主要業務とし、その後、北陸地区大学の国費外国人留学生に対する大学院予備教育（集中日本語研修コース）、日本語・日本文化研修プログラム、金沢大学短期留学プログラム（KUSEP）、日韓共同理工系学部留学生に対する予備教育等、順次事業を拡大してきた。また、金沢という地域性を活かしたカリキュラム開発や地域交流、最近の IT 技術を駆使した海外との遠隔相互教育システムなど質の改善・充実を図ってきている。留学生センターは、現在、5 つの部門で構成され、外国人留学生に対する日本語教育及び各教育プログラムの開発、コーディネート、教育の実施、及び、修学・生活上の相談指導を担当している。

1980 年代後半から現在まで、金沢大学における外国人留学生の数は飛躍的に増大しており、また、日本人学生の国際化を図る必要性が唱えられるなかで、金沢大学における国際化推進の一翼を担う留学生センターの果たす役割はますます重要となっている。設置以来、固有の専用施設を持たないハンディを背負いながら、外国人留学生や海外留学を目指す日本人学生のために取り組んできた活動内容を自ら総括し、今後の金沢大学の国際化のあり方を探るために、平成 14 年度に自己点検評価を実施し、公表した。

この自己点検評価を踏まえ、平成 15 年度に外部評価を実施するに至った。留学生センターの役割及び活動内容を多角的に評価するために、各分野で指導的な役割を果たしている先生方に外部評価委員をお願いした。平成 14 年度に実施した自己点検評価に新しいデータを加え、また、留学生センターの活動に関する多くの資料、さらに、施設見学やヒアリングを踏まえて厳正な評価をお願いした。評価委員の方々には大変お忙しいなか、本センターのために献身的なご努力を賜り、本報告書がまとめられた。その内容は、各評価委員から文章で提出された様式 A、B の報告書、及び、学内教職員、非常勤講師を対象に行った外部評価報告会の発言内容をまとめたものである。

本外部評価報告書は、今後の留学生センターのあり方、ひいては金沢大学における国際交流、留学生交流、国際教育など国際化のあり方を考えるための重要な指針を与えていると考える。今後、この内容を分析し、それに対応した改革を確実に実行することが当センターに課せられた使命であると思う。

最後に、この事業を担当して頂いた外部評価委員の先生方はもちろん、当センターの自己点検評価委員会、及び、学生部留学生課の職員の方々の労に心から謝意を表します。

平成 16 年 3 月

金沢大学留学生センター長

中 山 謙 二

I 外部評価実施までの経過

平成 15 年 7 月 8 日 留学生センター教官会議

留学生センター長より、留学生センター外部評価の必要性について説明があり、平成 15 年度に実施することとなった。同時に、外部評価実施ワーキンググループのメンバーを選考した。

平成 15 年 8 月 19 日 外部評価実施ワーキンググループ会議

外部評価実施のための年度内スケジュール、外部評価委員の選任、外部評価事項について検討。

平成 15 年 9 月 30 日 外部評価実施ワーキンググループ会議

外部評価委員への送付資料、外部評価報告書の項目事項についての検討。

平成 15 年 10 月 2 日

外部評価委員の委嘱（石原委員、越前谷委員、尾崎委員、古城委員、細川委員）。

平成 15 年 10 月 2 日

外部評価委員への資料及び外部評価報告書様式 A, B 送付。

外部評価委員に送付資料による外部評価を依頼。

（外部評価報告書様式 A, B の提出締め切り 11 月下旬。）

平成 15 年 10 月 9 日

外部評価委員の委嘱（井上委員）。

平成 15 年 10 月 10 日

外部評価委員への追加資料送付。

平成 15 年 11 月 18 日

外部評価委員に外部評価委員会及び外部評価報告会への出席を依頼。

平成 15 年 11 月 18 日

外部評価報告会の開催を学内に通知（E メール）。

平成 15 年 11 月 19 日

チャールズ・井上委員による講演会開催を学内に通知（E メール）。

平成 15 年 12 月 2 日

外部評価報告会の開催を学内に再通知（E メール）。

平成 15 年 12 月 6 日

外部評価委員会及び外部評価報告会を開催。

平成 15 年 12 月 9 日

チャールズ・井上委員による講演会開催を学内に再通知 (E メール)。

平成 15 年 12 月 12 日

チャールズ・井上委員による講演会を開催。

平成 16 年 3 月

外部評価報告書の完成予定。

Ⅱ 金沢大学外部評価委員名簿

名古屋大学留学生センター	教授	尾崎 明人
金沢市教育委員会	教育長	石原 多賀子
タフツ大学	教授	チャールズ・井上
東京農工大学留学生センター	教授	越前谷 明子
大阪大学留学生センター	教授	古城 紀雄
早稲田大学大学院日本語教育研究科	教授	細川 英雄

Ⅲ 外部評価のために参考とした資料

1. 『金大キャンパスの国際化を考えるー金沢大学留学生センター自己点検評価』
2. 金沢大学概要（平成 15 年度）
3. 数字で見る留学生交流 2002
4. 留学生センターWeb サイト
5. 金沢大学留学生センターニュース（バックナンバー）
6. 金沢大学留学生センター紀要（バックナンバー）
7. 金沢大学短期留学プログラム 2003.10・2004.9
8. KUSEP SYLLABUS (October 2003・September 2004)
9. 日本語・日本文化研修コース プログラム概要
10. 日本語・日本文化研修留学生 研究レポート集（2001・2002 年度）
11. 金沢大学留学生センター日本語研修コース文集（第 9 期，第 14 期）
12. 金沢大学 2002 年留学生生活実態調査報告書
13. 平成 14 年度金沢大学地域貢献推進事業『金沢学への招待』報告書
14. 「金沢大学留学生国際シンポジウム 2001」報告書
15. 留学生必携 金沢生活ガイドブック
16. 『研究者総覧』留学生センター分
17. 『金大キャンパスの国際化を考えるー金沢大学留学生センター自己点検評価』
追加資料 2002.10・2003.9

IV 外部評価委員による報告

金沢大学留学生センターの諸活動に関する外部評価の結果を以下の通り報告する。

金沢大学留学生センター外部評価委員会

- 委員長 尾崎 明人 (名古屋大学留学生センター教授)
- 委員 石原 多賀子 (金沢市教育委員会教育長)
- 委員 チャールズ・井上 (タフツ大学教授)
- 委員 越前谷 明子 (東京農工大学留学生センター教授)
- 委員 古城 紀雄 (大阪大学留学生センター教授)
- 委員 細川 英雄 (早稲田大学大学院日本語教育研究科教授)

1 はじめに

本委員会は、金沢大学留学生センター中山謙二センター長の委嘱を受け、平成 15 年 9 月に発足した。以来、3 か月余りの外部評価活動に関して、その過程および結果を以下の通り報告する。

2 外部評価の過程

1) 書面審査

平成 15 年 10 月に外部評価の基礎となる資料 16 点を送付いただいた。この中には留学生センターが平成 15 年 3 月に刊行した『金大キャンパスの国際化を考える』(金沢大学留学生センター自己点検評価 1995.4～2002.9)をはじめ、「金沢大学概要」「数字で見る留学生交流 2002」「金沢大学留学生センターニュース」「紀要」「金沢大学 2002 年留学生生活実態調査報告」などが含まれている。さらに、追加資料として 2002 年 10 月から 2003 年 9 月までの自己評価報告もお送りいただいた。

2) 中間報告

委員は上記の資料を精査し、各自が書面により中間報告を留学生センターに提出した。

3) ヒアリングと施設見学

平成 15 年 12 月 6 日に井上委員を除く 5 名が留学生センターにおいて外部評価委員会を開催し、ヒアリングを実施するとともに施設・設備の見学を行った。井上委員は翌週 12 月 12 日にヒアリングを行った。

ヒアリングでは各委員の中間報告に対して留学生センター長ならびにセンター教官から追加・補足説明があり、「金沢大学の基本理念・目標」「留学生センター施設の確保に係る本学の取り組み状況について」などの追加資料も提出された。

3 評価結果のとりまとめ

本委員会では、上記の資料ならびにヒアリング、施設見学を踏まえて外部評価結果の取りまとめを行ったが、各委員の専門領域、知識・経験、評価の観点、評価基準などが異なることから委員会としての統一的な評価結果を出すことはせず、各委員の評価及び意見を並記することとした。

評価報告は、(A) 留学生センター全体に関する評価及び意見、(B) 委員の専門に関する詳細な評価及び意見、の二つに分けることとし、(A) については留学生センターの自己点検評価報告書の構成を考慮して以下の7つの項目を立てることとした。

1. センターのあり方と目標
2. 教育活動・教育システム
3. 相談指導活動
4. 研究活動
5. 地域・社会貢献（講演・討論会・その他の活動を含む）
6. 組織・管理運営（施設・環境・財政を含む）
7. その他（点検評価システム・将来ビジョン等）

次の第4節に評価・意見を並記する。

4 評価結果

留学生センター全体に関連する評価及び意見

様式 A

金 沢 大 学 留 学 生 セ ン タ ー 外 部 評 価 報 告 書

委員 尾崎 明人

センター全体に関連する評価及び意見

(ページ表記は、『金大キャンパスの国際化を考える－金沢大学留学生センター自己点検評価－1995.4～2002.9』による)

1. センターのあり方と目標

・留学生センターの理念と目的が自己点検評価報告書(1～2頁)では現行の規程に依拠する形で書かれているという印象を受ける。規程に縛られずセンター教官が一致してめざす将来の方向を示すことが望まれる。

・金沢大学が策定した「金沢大学の基本理念・目標」あるいは「金沢大学が国際交流を推進するに際し実施を図るべき基本的事項(第3次まとめ)」(国際交流委員会,平成14年9月20日)などを踏まえて、留学生センターがどのような役割を担うのかを明示することが望ましい。

2. 教育活動・教育システム

<評価できる点>

・専任教員数が限られている中で5種類の異なる学習対象者のために多様なコースを運営し、毎年改善の試みを積み重ねている。

・ハイブリッド・ドラマプロジェクトなど新しい試みを行っている。

・限られたリソースを活用すべく総合日本語コースを開設、拡充を図っている。

・学生の成績評価の基準が明記されており、成績管理の体制が整備されている。学生の成績も概ね良好と判断される。

・各日本語コースで学生の授業評価を実施しており、全般的に日本語コースに対する満足度は高い。

・留学生と日本人学生との交流、共同学習を促す活動を展開している。

・全学、とりわけ教育学部への貢献が徐々に大きくなっている。

<今後の自己評価に期待する点>

・自己点検評価報告書では授業科目の内容が詳細に説明されているが、授業及びコースに対する学生の評価に関する記述が乏しい。実際には授業評価などを実施しているので、それらも報告書に盛り込む方がよかったと思われる。また、学生の成績や学生からの授業評価をどのように教育に反映させているかについてもより明確な形で報告することが望まれる。

3. 相談指導活動

<評価できる点>

・専任教員1名で幅広い活動を実施している。

・チューター制度の充実や学内協力体制の構築に努力している。

・指導相談に必要な基礎データの収集を継続的に行っている。

<今後の自己点検評価に期待する点>

・指導相談の活動を具体的に示す数字、派遣留学の実績を示す数字などが提示されているが、その数字を留学生センターがどう評価するかが必ずしも明らかではない。実績を示すと同時に自己評価を明示することが望まれる。

4. 研究活動

・教育活動、指導相談活動を踏まえた論文や口頭発表が多く、日常的な活動と研究を結びつける努力がなされている。センター教官共著の論文が多いと感じられるが、これも教官の協力体制が作られていることを示すものである。教育の実践と研究を結びつける試みを今後も続けていただきたい。同時に、各教官の専門領域において全国レベルの学会誌などに掲載される論文を増やすことも課題であろう。

5. 地域・社会貢献（講演・討論会・その他の活動を含む）

・「金沢大学地域貢献推進事業」として平成 14 年度に実施した公開講座『金沢学への招待』はセンターが主体的に取り組んだ事業として高く評価できる。

しかしながら、自己点検評価報告書に記載されている諸活動の記録を見ると、センターの主体的な取り組みが十分だとは言えない。

・日本語研修コースの同窓会、日本語・日本文化研修コースの合宿、ホームビジット、里親制度など有意義な活動を企画、実施しており、高く評価できる。

しかし、これらの有意義な活動が自己点検評価報告書の中では「講演・討論会・その他の活動」として一括されており、活動の意義づけや評価が十分に述べられていない。社会貢献や日本語教育などの観点からより明確に自己評価することが望まれる。

・センター創設以来行われてきた地域連携、地域貢献のさまざまな活動が報告されており、センターの努力がうかがわれる。報告書第 II 編「留学生センターの将来構想」の中でも社会貢献に関する目標が掲げられている。より積極的な地域貢献を期待したい。

6. 組織・管理運営（施設・環境・財政を含む）

・現状ではセンター独自のスペースが十分確保されていないと思われる。このような状況では十分な教育・研究活動は望めないであろう。すでにこの問題を解消すべく全学的な対応策がとられているとのことなので、遠からずキャンパスの国際化を推進する拠点としてセンターの施設が整備されるものと期待する。

・組織改革の一連の動きの中でセンターの各教官がそれぞれの研究テーマに関わりの深い教育・研究組織との関係を強めるという構想が述べられている（報告書 164 頁）。この方向は人的リソースを活用するという観点から評価できる。

・教官昇任の基準が明文化されているかどうか不明である。明文化されていなければ、昇任基準を策定するべきであろう。

7. その他（点検評価システム・将来ビジョン等）

・具体的な目標を設定し、その目標がどこまで達成されたか、達成されなかったのはなぜかを点検し、次のステップを考えることが自己点検評価の目的である。今回の自己点検評価報告は第 1 回目ということで、これまでの活動を総括するという点に重点が置かれていたように思われる。次回の自己点検評価では、評価の観点と方法を一層明確にし、到達目標に照らした自己評価を行うことが望まれる。

様式 A

金 沢 大 学 留 学 生 セ ン タ ー 外 部 評 価 報 告 書

委員 石原 多賀子

センター全体に関連する評価及び意見

1. センターのあり方と目標
金沢大学のめざす方向性の中で留学生センターの存在と役割は重要である。 留学生センターの目標として「外国人留学生及び海外留学を希望する金沢大学の学生に、必要な教育及び指導助言等を行う」とあるが、留学生の専攻とその基礎教育としての日本語教育のあり方について、具体的な教育・指導体制がわかりにくい。
2. 教育活動・教育システム
日本語研修プログラムはよく工夫されており、多様な教育活動が展開されている。 日本の伝統文化や日本事情等の科目はユニークであり、高く評価したい。 反面、海外留学を希望する学生は、どのようなレベルの教育を受けているのか不明である。
3. 相談指導活動
留学生の相談の拠点として、ケアやカウンセリングなど多様な取組みが積極的にされている点が評価される。
4. 研究活動
活発な研究活動が行われていることは高く評価したい。 ただ、研究テーマの設定、研究活動が、留学生センターがめざす目標との関係においてやや難しいと感じられるものもある。
5. 地域・社会貢献（講演・討論会・その他の活動を含む）
留学生センターとして留学生との地域交流に意欲的に取り組んでいる。留学生にとっても地域社会にとっても大事な領域であるので、カリキュラムの中で体系的・系統的に取り組めるよう今後も充実してほしい。
6. 組織・管理運営（施設・環境・財政を含む）
留学生センターとして独立した施設の検討が必要である。 留学生センターの管理運営のシステムと全学的な意思決定との関係がわかりにくい。
7. その他（点検評価システム・将来ビジョン等）
留学生センターがその目的を果たし、機能していくためには、教員とパートナーシップを組める事務職員の企画運営能力や専門性が今後必要になってくると思う。

様式 A

金 沢 大 学 留 学 生 セ ン ター 外 部 評 価 報 告 書

委員 越前谷 明子

センター全体に関連する評価及び意見

(ページ表記は、『金大キャンパスの国際化を考えるー金沢大学留学生センター自己点検評価ー1995.4～2002.9』による)

1. センターのあり方と目標

金沢大学の国際化の推進という理念を実現するための組織として留学生センターが位置づけられ、留学生教育と国際交流の推進を目標に掲げる本留学生センターのあり方は、順当であると思われる。今後、「金沢大学が国際交流を推進するに際し実施を図るべき基本的事項(第3次まとめ)」に謳われている全学で目指すべき目標と、p.163以降にある留学生センターの課題を実現していくためには、教育系と事務系職員が強力な協力体制を作り、実現に向けて歩を進めていかなくてはならない。

2. 教育活動・教育システム

全般的に教育活動は活発であり、よく考えられた教育システムを構築、運営している。詳細は特記事項(様式B):教育活動に関する評価をご覧いただきたい。

3. 相談指導活動

学内外のネットワークがうまく作用して相談指導活動が進められている。非常勤のカウンセラーを配置するなど、留学生数の増加に対応した改善も行われつつある。p.105以降に活動状況が述べられ、追加資料に平成9年から15年までの相談件数が示されている。留学生からだけでなく、日本人学生や教官・事務官などからの相談も相当数あり、センターの相談業務が大学で認識され、機能していることがわかる。今後これまでの相談内容と件数の推移を分析し、起こりうる問題を予測し、それを指導教官懇談会・オリエンテーション・地域活動に還元してより充実した相談指導業務が行われることを期待する。なおp.107に、「部局を超えた全学的な対応が必要とされる場合にはセンター内に設置されている留学生相談・指導専門委員会が設置されている」とあるが、実態に関する記述がなく活動が見えない。全学相談指導との連携をしめす図があれば、その位置づけがはっきりすると思われる。

金沢大学で目指す「日本人学生の国際化」に関して一番仕事ができる、またすることを求められている部局は、留学生センターである。そのための人員がセンターに既に配置されている(組織・管理運営の項参照)。「日本人学生の国際化」に関しての具体的な仕事は、日本人学生の海外派遣(送り出し)と語学(特に英語)と異文化間コミュニケーション教育の実施と考えられるが、現時点では実際に留学する日本人学生数は少なく(p.111)、また実数も掴み切れていないようで、今後、各部局と協働して組織やカリキュラム作りに向けて積極的に諸活動が展開されていくことが期待される。

現在、留学生センターは、海外の大学に関する情報提供のための「海外留学フェア」を主催し、そこでは金沢大で学んでいる外国人学生が自分の大学を紹介し留学を呼びかけ、外国語教育研究センターはブースを設置している。他方、生協は渡航準備支援を提供するなど、海外に行きやすい環境作りを学内組織を巻き込んで広範囲に行っている。フェアのビデオ資料から、このフェアが単なる情報提供にとどまらず、「留学生が留学生を生む」という創造的な戦略として成功しているように感じられた。

4. 研究活動

留学生センター共通の悩みは、コースが開かれている間は運営業務に追われとにかく忙し過ぎるということである。必然的に研究活動は、コースが開かれていない、短い期間で集中的に行わざるを得ない。9人の専任教員がそれぞれの分野で着実に研究活動を行っていくことは大学の教員として当然であるが、センターの実態を知る者から見ると大変な努力を必要とするということがわかる。

一方、未だに「留学生センターは教える仕事さえしていればよい」という意見も根強い。これはセンターが大学の中に置かれている意味を考えていない偏見であるが、そうした誤解をなくすためにも、センター全員が活発に、それとかなりの水準で研究を行う必要がある。そのためには、センターの専任教員が、今の仕事分担やそれぞれの領域の枠を越えて、日頃の教育活動の中からお互いの共通の研究シーズを見つけ、共同研究し、それを教育に還元する活動をもっと積極的に進める必要がある。また、非常勤講師との共同研究はこれまでも「金沢大学留学生センター紀要」に発表されているが、非常勤講師に研究の機会を与え、ボトムアップを進めることもセンターの社会的役割として重要である。そして、現在の「紀要」よりも、さらに査読体制など論文評価が客観的に確立される、例えば、北陸地域の関係教育機関を巻き込んだ高水準の論文集などを発刊し、研究成果を発表することで、研究レベルの向上を目指すことも考えてみてはどうだろうか。

5. 地域・社会貢献（講演・討論会・その他の活動を含む）

本センターで行っている地域との交流活動は、金沢という地域の特徴を生かしたセンター活動として、全国的にみてトップクラスであることは間違いない。多くの市民が授業、課外活動、ホームステイなどで、センターに協力を惜しまず、センターからも地域の行事、講座などへ積極的に参加している。また、国際シンポジウムや各コースの課題の検討会などを主催し、留学生教育に関する発信も活発である。日本語能力追跡調査・同窓会はユニークな試みであり、ここからの情報が日本語研修コースにフィードバックされ、教育改善の役に立っている。これだけのことを、スムーズに進めるためには、具体的な記述はないが、教員を支える事務サイドのマネジメント力も大きいと推測される。

6. 組織・管理運営（施設・環境・財政を含む）

センターの組織をみると、2003年4月に専任教員が1名増員され、国際教育研究部門が新設されている。これはこれからのセンターの大きな役割の一つである、日本人学生の留学支援を組織として具体化したものであり、他のセンターがその対応に苦慮しているのに比して、妥当で素早い措置である。これまでの金沢大学留学生センターは、留学生に軸をおいた教育で成果を上げてきたが、これからは全学の学生が教育対象であるという認識を持ちつつ、さらに様々な学内からのセンターに対するニーズに応じて行かなくてはならないという意識を持っていることが窺われる。センターの他の部門の教員や専門教員との教育研究のコラボレーションを心がけながら、新たな道を切り開いてほしい。

施設であるが、センター独自の建物がないことは、センターの実力が発揮できず、教育研究に支障を及ぼしていることは明白である。共同作業の多い教育活動、研究活動の推進にセンター独自の教育研究空間を確保することは必須のことである。同じ状況下に10年間置かれてきた評価者としては、現在の金沢大学留学生センターのご苦勞を十分理解できるし、また同情の念を禁じ得ない。今回外部評価全体報告会と施設見学と追加資料を通じてわかったことは、金沢大学が総合移転計画事業の最中でもあり、センターの順位はあまり高くないこと、そのために経過措置として学内の各委員会で施設の使用見直しが図られ、センター施設整備が具体的に検討されているということであった。p.163 以下のセンターの中期的目標に掲げられた将来構想を実現するために、建物を含めた環境整備の一層の充実が望まれる。

施設に関して特記すべきことは、図書館の充実ぶりがある。日本人学生と全く区別なくすべてのサービスが留学生も受けられるように配慮されている上に、海外放送や多言語ソフトが使えるパソコンの導入など外国人に対するきめ細かな待遇が諸処に実現されている。最も特筆すべきことは、留学生のための図書コーナーが開架されており、実に2500冊の図書が置かれていることである。日本語・日本事情・異文化接触・日本の国際交流などに関する有用な図書が丁寧に選択されており、毎年増やしていくことになっている。留学生課からの財政支援があつてということだが、これほど留学生用の図書を一堂に開架している図書館はあまりないと思われる。

また国際交流会館の部屋ごとにインターネットに接続できる設備を配し、パソコンも貸し出すなど、情報化に対応して次々と整備が進められている。

財政に関して、独立行政法人化に伴い経費節減は必須である。これまでのきめの細かさを追求したセンターの教育内容について、財政面からの圧迫を回避できそうにもない。専任教

官の負担増が心配される。さらに、他部局でも予算の切りつめは同じであることから、センターへの期待も一層大きくなり、そのことがセンター教官の負担増となる可能性も高い。このような厳しい状況の中、センターの専任教官がチームを組むことで負担増の軽減をお互いに図るなど創意工夫をしながら、教育・研究機関として発展を志向してほしい。

7. その他（点検評価システム・将来ビジョン等）

『金大キャンパスの国際化を考える－金沢大学留学生センター自己点検評価－1995.4～2002.9』は、大変な労作である。これに見られるように、金沢大学留学生センターはこれまでの間断なき努力と意欲的な活動を行ってきており、上記の大変詳細な自己点検評価を公表された。そこに述べられている将来ビジョンも適切であり、そのことを具現して金沢大学留学生センターがさらに発展することを強く願うものである。

様式 A

金 沢 大 学 留 学 生 セ ン タ ー 外 部 評 価 報 告 書

委員 古城 紀雄

センター全体に関連する評価及び意見

1. センターのあり方と目標

先見性をもって設置されていた「留学生教育センター」を基盤に、平成 7 年に学内共同教育研究施設として省令化された「金沢大学留学生センター」は、この大学が標榜する「世界に開かれた研究・教育」を目指して、現在は 5 つの部門が有効に機能して今日に至っている。

留学生交流にかかる教育・指導とともに、一方で、この教育・指導にかかる質的向上を目的とした「研究及び調査に関する活動は必須である」との認識のもとに、その充実を希求していることは評価される。

2. 教育活動・教育システム

日本語研修プログラムでは、多様な留学生への適切な教育体制を構築し対処している。日韓共同理工系学部留学生対象の予備教育では、工学部・理学部との協調のもとで積極的な教育・指導が達成されている。系統的にデザインされた日本語・日本文化研修生プログラム、英語での講義を主旨とした KUSEP プログラムでは、ともに高い教育効果をもたらしている。また、従来の「日本語補講」は「総合日本語コース」として改編されてより機能的に実施され、これらの教育活動及びプログラムは、それぞれ懸命な改善努力の結果として高い評価を受けるべき内容となっている。

3. 相談指導活動

「外国人留学生の修学上・生活上の指導・助言」を中心にしつつも、学内外でのコミュニティにおいて当該留学生が自然に生活し得る環境がより整備されてゆくことを念頭においた活動にも精力的に参画している。この種の活動は特筆されるべき内容をもっており、殊に、地域社会での異文化理解の進展及び日本人学生の海外留学推進の流れも積極的に意図されている。

4. 研究活動

多様なプログラムの活発な展開は同時に教官の教育活動の時間的負担の大きさ懸念されるが、大学教官としての積極的で中断なき研究活動もまた前向きに展開されていることは評価に値する。研究分野に加えおもに活動している学会も多様で、客観的な評価が困難ではあるが、査読論文の数的な改善は志向すべき方向かも知れない。

5. 地域・社会貢献（講演・討論会・その他の活動を含む）

地域社会との連携活動については目を見張る実績が示されている。それが教育指導・日本語教育指導の両部門の教官に対して、極めて多数回の連携・講演などの依頼がなされ、それに対して実に前向きに対応している。また、国際理解教育支援及び里親制度の実施などを通じて、地域社会の国際化に大きく貢献していることは明白である。

6. 組織・管理運営（施設・環境・財政を含む）

全学規模の「留学生委員会」とすみ分けつつ、教授会機能を果たす「留学生センター委員会」を中心に、良く整備された組織が構築されている。今後は教官研究費の大幅な増額が期待されるところであり課題であろう。また、センター長室は設置されておらず、教室、研究室などについてもひとつにまとまった建物への配置がまだなされていない状況であり、抜本的な改善が期待される。

7. その他（点検評価システム・将来ビジョン等）

十分な準備のもとに作成された自己評価書が作成されていることから、自己点検・評価から外部評価の流れに対して、センター全体での積極的な取り組みを伺い知ることができる。このことの具体化のために計画的かつ継続的にデータを蓄積し、整理・解析されてきた姿勢もまた高い評価を受けることであろう。

様式 A

金 沢 大 学 留 学 生 セ ン ター 外 部 評 価 報 告 書

委員 細川 英雄

センター全体に関連する評価及び意見

(ページ表記は、『金大キャンパスの国際化を考えるー金沢大学留学生センター自己点検評価ー1995.4～2002.9』による)

1. センターのあり方と目標

学内共同教育研究施設の留学生センターとして「外国人留学生及び海外留学を希望する金沢大学の学生に、必要な教育および指導助言等を行う」(p.1)とあるが、留学生の受け入れと日本人の送り出し双方の連携はどのように行われているかが、文面からは明らかではない。この点を、より明確にして、双方向的な交流や連携について積極的に取り組んでほしい。

「全学の留学生向け日本語教育」(p.1)とあるが、部局ごとの留学生とその内訳、また問題とその解決はどのように行われているかが資料からは不明(ヒアリングの結果、かなり明確になった)。学部と大学院では、留学生の日本語へのモチベーションも異なるため、この点に配慮した対応が必要だろう。

2. 教育活動・教育システム

総合的なカリキュラムによって多彩な教育活動が行われている点が評価できる。とくにプロジェクト活動や地域との交流に力点がおかれ、独自の教育システムへの配慮が見られる。ただ、地域見学として、伝統文化や現代日本社会の見学によって、「日本事情」科目としての意義も認められるが、そのことが日本語教育とのリンクをどのように位置づけるかが教育活動として不鮮明である。ヒアリングの結果、この点については、かなり意識的かつ積極的な試みがなされていることが明らかになった。後に述べる日本語教育への取り組みと合わせ、より意欲的な活動の展開することを期待する。

3. 相談指導活動

さまざまな対応によって留学生のためのケアが考慮されている点が評価できる。日本人との交流に関して、積極的な参加が少ないとの指摘もあるが、そのための方策として、具体的な試みを、より示してほしい。ヒアリングの結果、センター発の催しも企画されていることがわかり、意欲的な取り組みのなされていることが評価できる。今後とも、留学生と日本人という2項対立ではなく、ともに学ぶ場を提供するための、大学としての具体的な施策を展開されたい。

4. 研究活動

専任教員の専門がやや語学的な分野に偏りが見られ、教育活動との関係で見ると、言語分析や調査報告等に集中し、教育実践に関する理念や方法論を追求するものが少ないのは残念である。地域との連携等を踏まえた教育活動が盛んに見られる中で、社会・文化のための日本語教育に資する新しい考え方等を視野に入れた研究が望まれよう。また、日本語教育に関する科学研究費申請・受託やその他の外部資金の導入に関して記述が見られない。

5. 地域・社会貢献(講演・討論会・その他の活動を含む)

留学生の地域交流は、留学生教育にとって重要な視点であり、その活性化への方策が望まれるが、ややイベント的なものが目立つ。できるだけ継続的であることが望まれよう。また、そうした地域活動それ自体への評価を明確にし、単なるイベントで終わらせない努力が必要だろう。地域との交流は、さまざまな側面が考えられ、一概にこうすればいいという解決策があるわけではないだろう。そのためには、できるだけ多くの情報を共有し、かつ内容を公開することが不可欠であろう。

6. 組織・管理運営（施設・環境・財政を含む）

施設に関しては、固有の占有施設を持つべきである。留学生教育は、多人数の一斉授業になじまない性格を有しており、そのためには固有の教室や共同作業等の空間が不可欠である。組織の問題として、「教官会」と「委員会」の関係が明確でない。留学生センターとしての最終意思決定機関がどちらであるかを明確にすべきか。将来的には、センターを自立的に運営するための、「教授会」組織になることが望ましいか。財政に関しては、収支決算が明示されていないため、言及できない。ただ、この問題は、ひとり金沢大学だけの事柄ではなく、独立行政法人としての現国立大学全体の財政システムに関わることであるので、ここでの言及は差し控える。

7. その他（点検評価システム・将来ビジョン等）

留学生教育の問題は、留学生センターの組織・管理運営にとどまらず、大学全体の問題である。各部局との相互点検システムによって、それぞれの部局の問題点も浮上するし、大学全体としての留学生教育への取り組みの力点や特色も明らかになる。その意味で、「国際部」(仮称)の設置は、重要であろう。留学生センターにとどまらない、大学における留学生の受け入れ及びその教育の全体像を、横断的に見渡すことができるだろう。留学生センターが、学内共同機関としての機能を果たすとともに、自立的な活動ができるよう、事務組織の改変が必要であろうし、また、教育活動を通して、全学の国際化を推進する部局としての発言権を高めてほしい。そのことによって、金沢大学の留学生教育がますます発展することを期待するものである。

評価委員の専門分野に関する詳細な評価及び意見

様式 B

金 沢 大 学 留 学 生 セ ン タ ー 外 部 評 価 報 告 書

委員 尾崎 明人

特記事項：評価委員の専門分野に関する詳細な評価及び意見

教育部門について見解を述べる。

1. 日本語研修コース
 - ・緻密なカリキュラムが編成されている。A-K まで多様な授業が提供されており、充実したプログラムである。
 - ・研修生の最終成績を ABC の 3 段階で示し、各学期の学生の成績を明示している点は優れている。学生の成績は良好であり、本コースは十分な教育成果をあげていると判断される。
 - ・後期には研究留学生と教員研修生と一緒に受講しており、コース運営上難しい面があるが、ハイブリッド・ドラマプロジェクトなどの試みを通して問題の解消に努めている点も優れている。
 - ・主教材である『みんなの日本語』の使用を継続するかどうかとも検討中とのことであり、常にコースの改善に取り組んでいることがよく分かった。
2. 日韓プログラム
 - ・受け入れ学生数が少ないにもかかわらず、韓国留学生のために総合日本語 5 コマ、専門日本語 5 コマ（平成 13 年度）を開講しており、受け入れの努力は高く評価できる。
 - ・学部入学前の留学生に対して充実したサポート体制を組んでおり、金沢大学の熱意が感じられる。
3. 日本語・日本文化研修コース
 - ・日本語 5 コマ（選択必修）、日本文化関係 4 コマという履修体制は適切なものである。日本文化演習では学内、学外から様々な知識、経験を持つ講師が授業を担当しており、充実した教育内容になっている。
 - ・里親制度、日本人学生チューターサークルなど留学生が人的ネットワークを広げられるような工夫がなされており、高く評価できる。
 - ・自己点検評価報告書には成績評価基準が明記されており、追加資料では修了学生の成績も提示されている。成績は極めて良好であり、教育効果があがっていると判断される。
4. 短期留学生プログラム
 - ・短期交換学生の日本語の成績については若干の懸念を感じる。追加資料によれば、第 1 期から第 5 期までの間に 248 名が受講し、そのうち 38 名が不合格または受講中止となっている。不合格者は減る傾向にあるが、この点についての点検評価が求められる。また、合格者 208 名中「優」は 93 名である。成績判定の基準を含めて、この成果に関する自己評価が求められる。
5. 総合日本語コース
 - ・対象学生が多様なことを考えると、カリキュラムの編成、教材の選定・作成は難しいが、レベル設定は適切であり、教材の選定もおおむね適切であると思われる。
 - ・初中級（C1）の教材開発が進められている。市販教材では満たせない部分があるため、このような教材開発を計画的、継続的に進めていることは評価できる。
 - ・コースの管理がきわめて大変だと思われるが、プレースメント・テスト、レベルの確定などきめ細かな配慮がなされており、全体として管理の行き届いた優れたコースである。
 - ・受講者数が 20 名を越えるクラスはなく、日本語学習に適したクラスサイズになっている。
 - ・各クラスの合格者数はかなり高く、教育の成果があがっている。
 - ・総合日本語コースを履修中の学生は、日本語必修の学生（日本語・日本文化研修生、短期交換学生、日韓プログラムの学生など）を除くと、全学留学生の 2 割強である。この受講者比率が適正かどうかの判断ができない。総合日本語コースが全学留学生のニーズにどこまで対応しているかを点検、評価することが望まれる。

金沢大学留学生センターの日本語教育は、しっかりした管理体制のもと緻密なカリキュラムが組まれている素晴らしいものである。担当教官の献身的な努力に敬意を表する。

自己点検評価報告書には各コースごとに問題点の指摘があるが、他大学でも同様の問題を抱えているので、金沢大学の取り組みとその成果を今後広く紹介していただきたい。

様式 B

金 沢 大 学 留 学 生 セ ン タ ー 外 部 評 価 報 告 書

委員 石原 多賀子

特記事項：評価委員の専門分野に関する詳細な評価及び意見

地域・社会貢献について

- 地域社会との交流・連携事業は、金沢という地域特性を生かした質の高いプログラムが多様に展開した点は、高く評価される。市民参画型の講演・授業、国際理解教育への支援、里親制度など、地域社会との双方向型の交流・貢献事業は全国的にも高い評価を得ている。

- ・金沢大学留学生シンポジウムの報告書
・金沢大学日本語研修コースの文集
・金沢学への招待報告書

いずれも留学生センターの主催事業として良い成果を修めている。これらを企画し、市民に発信していくことは、地域貢献の質の高さを示している。

- 留学生が、市内の小・中・高校生と交流することは、子どもたちにとっても、また、留学生にとっても貴重な教育的体験であり、評判も良い。日本語・日本文化研修留学生プログラムでは、カリキュラムの中に留学生の学校訪問が位置づけられている点は、ユニークであり、とても良いと思う。

- 留学生センターにおいて、留学生が金沢大学の日本人の学生と交流し、共にシンポジウムや地域貢献できる体制づくりが構築できることを期待する。日本の学生にインパクトを与え、共に学び、共に遊び、共に活動できることこそ、最も基本かつ大切である。

様式 B

金 沢 大 学 留 学 生 セ ン ター 外 部 評 価 報 告 書

委員 Charles Shirō Inouye

特記事項：評価委員の専門分野に関する詳細な評価及び意見

(チャールズ井上先生には、「協定校から見た留学生教育・交流のあり方」についての評価をお願いした。)

協定校から見た留学生教育・交流のあり方

タフツ大学は、国際的な大学である。5,000 人の学部生の 3 割ぐらゐは、英語以外の言語を母国語にしている。三年生になると、学生の約 40%が留学する。外国語をまじめに勉強しなければ卒業できないようになってゐるし、日本語、中国語、ロシア語、ドイツ語、ヘブライ語、アラビア語、スワヒリ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ヒンズー語等の習得を基盤にしている国際関係学の専門は有名で、アメリカで一番優れてゐると認められてゐる。

留学プログラムは七つある。Tufts in Japan はその一つである。日本語のプログラムは、1980 年ごろに設立され、Tufts in Japan は 10 年前から始まった。毎年約 10 人ほどが日本に来て勉強するが、その半分ぐらゐは金沢に来る。タフツの日本での留学プログラムを設立しようとしてゐた頃、金沢大学以外の所も検討したが、結局金大にした。その理由は、いくつかある。

まず、留学プログラムがすでに多く存在している場所を避けた。そして、勉強にいい環境を求めた。面白い、住みやすい、文化的基準の高いところがいい。古いものも、新しいものもある町が好ましい。言ってみれば、ボストンのような所を探した。

泉鏡花の研究家でもある私にとって、金沢はゆかりのある町だ。何度も訪問したことがあり、家族で滞在したこともある。それで、日本の留学プログラムを作る時に、是非金沢にしたかったのだが、町はよくても、その町にある大学がプログラムの必要条件に合うかどうかは、別問題だ。

何年間も検討した結果、タフツ大学と金沢大学が協定を結ぶようになったのは、ご存知の通りである。金沢大学の留学生センターを評価するに当たって、私たちの感謝の気持ちをまず述べたいと思う。パートナーとして、私たちがお互いに頑張りあつてきたのだが、よくやったと思わないではゐられない。

国際的な交流は決して簡単なものではない。特に、教育の面においては、文化的な違いが多く、それをなんとか乗り越えるには、非常な努力と忍耐が必要だと思う。これからも努力しようという意図から、今までの問題点を挙げつつ考えてみよう。

まず、resident director の問題である。うちの大学の留学プログラムはいずれも質の高いもので、アメリカではよく知られてゐる。その原因は、なんと言っても、外国の勉強先に、タフツが雇つた学生の世話をする人がいるということだ。金沢では、このディレクターは松田その子で、何年間も世話になつてゐる。学生たちは皆、松田さんは Tufts in Japan の宝物だと言う。

タフツの学費はとても高い。そのため、留学する際、タフツの留学プログラムより安いプログラムを学生が選択する可能性があるので、原則として、ほかのプログラムより、自分のものを優れたものにしなければならない。国によって、協定校が設けてある留学生センターの質がかなり違う。ほとんど何もないという所もあれば、金沢のような立派なセンターもある。外国人をよく世話する日本人の意識が表れてゐるわけだ。しかし、タフツ専任のディレクターを雇わなければならないことは、センターの方々にとっては、理解しにくいことかもしれない。そのため、松田さんの仕事とセンターの仕事をできるだけはっきり分けたほうがいいということで、彼女は、日常的な助けはするが、学問的な勧告はしないということになつてゐる。この妥協点を納得したうえで、タフツと金沢大学が協定を結んだわけだ。それゆゑ、松田さんとセンターの方々が協力し

合っていただき、生活の面と勉強の面の総合的な関係を相談する機会があればいいと思う。

第二点としては、金沢大学の日本語教授法とタフツのそれとは、かなり違っているように思う。どちらがいいというわけではなく、まず使う教科書が違う。文法の説明の仕方も違う。試験の回数とフォーカスもかなり違う。そのため、学生が困る場合もある。優秀な学生は、どの方法でも、日本語を問題なく学ぶが、そうでない学生は、慣れていないものには耐えられない。漢字に馴染んでいる留学生とそうでない者もいる。韓国語を知っているから、日本語の文法を分かりやすいと思う学生もいる。こういう学生を同じクラスに入れて、同じ教授法を利用すると、いい結果が出るかどうかは疑わしい。とは言え、それぞれの文化に合ったクラスを作るのも大変なことだ。この点においても、これから解決できる可能性があるが、そのためには、先生方の交流の道を開かなければいけない。

第三点は、こちらの要求が多いように思われるかもしれないが、国際交流をするには、どうしても、従来のやり方では対応しきれない傾向がある。必要に応じて、私の教育の原理や方法も変化していく。例えばアメリカでは、高校で日本語を勉強する学生がだんだん増えているにもかかわらず、日本語で講義を聴ける留学生は少ない。そのため KUSEP が生まれたのだが、この点もありがたく思っている。しかし、学生に訊くと、先生によって英語の力が一貫していないようだ。これは仕方がない問題だ。昔から、日本人の外国語の受容は、音より形と意味を重んじた結果、話す力が読み書きの力に比べて劣るわけだ。しかし、これも、人材の交流によって改善できる点である。将来、協定学校同士の先生方を交流させる道も考えてはどうであろうか。

第四点は、組織の違いが問題になるケースが多い。例えば、日本では学校は四月から始まる。アメリカでは九月からである。夏の間休む国もあれば、休まない国もある。金沢大学の暦が多少このズレに合わせるようになったこともありがたい。

おそらく、中でも一番大きな問題は、受入れのタイミングだろう。金沢に行きたい学生は 12 月に申請書を出す。しかし、自分が受け入れられるかどうか分からない。ほかの留学プログラムの方が早めに分かるので、金沢からの返事を待たずに違う所に行ってしまう。ある年は 9 人も金沢に行くことを希望していたが、結局 2 人しか行かなかった。しかも、その 2 人は最も優秀な学生ではなかった。

これについて、センターの皆様にご相談したところ、金沢大学は国立大学だから、かなり官僚主義的なところがあると言われた。だから新しいことをやるのが難しく、問題が出てきた時の対応が鈍い。その反面、安定性がある、何かをやる時に中途半端なことをやらない。何回か金沢に足を運んで、この問題を解決することができた。受け入れるタイミングと人数と奨学金のこともかなりいい条件にいただいた。やはり、日本の国際化が進むにつれて、柔軟性を持つ大切さがよく分かる。

このように問題点ばかり出しては、いい評価にならないであろうから、留学生センターの長所もいくつか挙げてみよう。概して言えば、短期間で、センターがかなり有効な組織になっていると思う。多面的で、需要に応じて発展している。有能なスタッフが揃っており、一生懸命に仕事をしている。

私の一番感心しているところは、センターのスタッフが留学生を実際に教えていることだ。やはり大学においては、事務員と教員を別々に考えてはいけない。いい会社にも、同じことが言える。アメリカの欠点は、大学であろうと会社であろうと、管理職が仕事の現場から離れてしまう場合が多すぎることだ。

金沢大学留学生センターのサービス精神は、素晴らしいものだ。個人的なレベルはともかく、組織的なレベルでは、金沢大学はタフツ大学より充実したものと言わなければならない。情報機関が豊富で、学生の満足感が高い。これからも、いろいろな問題が出てくるであろうが、この歴史のある、豊かな金沢を世界中の留学生が集まるメッカにすることを望んでいる。そこまで発展する可能性がある、私は信じている。

様式 B

金 沢 大 学 留 学 生 セ ン タ ー 外 部 評 価 報 告 書

委員 越前谷 明子

特記事項：評価委員の専門分野に関する詳細な評価及び意見

教育活動に関する評価

『金大キャンパスの国際化を考えるー金沢大学留学生センター自己点検評価ー1995.4～2002.9』によると、平成7年発足からの7年間で極めて高い水準の教育を維持、実践してきたことがうかがえる。さまざまな困難をかかえながら、留学生の諸能力向上のための教育活動を展開していることに心からの敬意を表するものである。以下、金沢大学留学生センターの6つのプログラムについて、特に大学院入学前予備コース、日本語・日本文化研修コース、総合日本語コースを中心に同じ国立大学留学生センターの教官としていくつか意見を述べるが、全般的に判断して金沢大学留学生センターの教育活動は、全国の留学生センターと比較して極めて高いレベルにあると言えるだろう。(以下のページ表記は、『金大キャンパスの国際化を考えるー金沢大学留学生センター自己点検評価ー1995.4～2002.9』による)

1. 大学院入学前予備コース（日本語研修コース）について

留学生センターの日本語教育の中心的存在である日本語研修コースでは、留学生の様々な学習背景と能力にいかにかめ細かく対応できるかということでコースの成否が決まると言っても過言ではない。しかし、人的（投入できる専任教官数と非常勤講師数は限られている）時間的（大学院生として専門の研究に入る前の6か月17週しかない）空間的（固有の施設がない）制限のなかではなかなか充実したプログラムを運営するのは難しいと推測できる。p.9に、「每期教育内容に改良を加えてきた」と簡単に書かれているが、実際には運営にあたる専任教官の不断努力があったに違いない。その一方、新しいことを果敢に導入していかなければ発展は望めない。その点、本コースの「プロジェクト専門への橋渡し」は、p.10に「敢えて初級の段階からプロジェクトを行い、学生のレベルに合わせて丁寧に指導している」とあるように、専門での口頭発表指導の実態調査を踏まえて、担当教官が教材を作成し、改善を重ね、現在の形で行われているもので、きめの細かい指導の結果、大変レベルの高い発表が行われている。後期の「ハイブリッド・ドラマプロジェクト」では、学習目的の異なる学生を一つの枠の中でそれぞれに日本語の成果をあげることができるようと考えられたもので、『金沢大学留学生センター紀要第2号』にプロジェクト実現への詳細と、「金沢大学留学生センター日本語研修コースドラマプロジェクト報告」に参加学生の感想などが述べられていて、参加した学生の満足度も大変高い。高い教育的効果を発揮するために、指導に当たった教官は多大な時間を投じたであろうし、忍耐と努力は並々ならぬものであったと推察できる。今後、センターを取り巻く状況が大きく変化していく中で、こうした教育を続けていけるかどうか、センターの教育活動全体からみたバランスを再考し、コース内容の開発など新たな挑戦をしていかなければならないだろう。

2. 日本語・日本文化研修コースについて

金沢大学留学生センターで行われている日本語・日本文化研修コースは、日本文化科目として理想的に運営されていると言えるだろう。ニーズの多様化に応えるための試行錯誤を7年間続け、さらにこれからも続くとp.57にあるが、「日本文化演習Ⅰ、Ⅱ」「日本文化体験実習」「調査実習」の詳細を見ると、そこでは非常に綿密に組み上げられた日本文化に

関する教育がシステムとして行われていることがわかる。

これは、プログラムをコーディネートしている専任教官の能力の高さと、プログラムへのセンターの外からの支援があつてのことと思われる。支援の一つは、学内教官の本コース（のみならず留学生センター）への協力である。センター以外の専門教官の協力を必要とするとき、多くのセンターでは「言うは易く、行うは難し」の壁につき当たっているはずである。金沢大学がそのハードルを越えているということは、金沢大学自体が留学生センターの活動を評価し、金沢大学の国際化を担うに値するセンターであるという認識があるからこそであろう。二つ目は、地域との密接な関係である。金沢が文化を慈しむ風土であると世上で言われていることであるが、これほどの内容の、これほどの人たちが日研コースに集まり交流を展開しているのには驚かされる。授業担当のみならず、里親制度や合宿見学、日本人学生との共同作業など多彩な地域活動が用意されているが、ここでの人々の金沢大学留学生センターに対する、信頼感、協調感が高く、「国際化」の第一ステップが地域との連携にあるとしたら、このセンターの取り組みはまさにそれを具現化していると言ってよい。

ただ一つ気になることは、本コースの日本語教育である。「受講者はそれぞれの日本語能力に応じ、総合日本語コースに合流し、中・上級の日本語コースを履修する」(p.32)「総合日本語コースの最上級のレベルの用意が必要」(p.58) (評価者要約)とあるが、特に日研生が受けている上級の日本語教育の実態がよく見えてこない。各種講義や活動については記述がないが、おそらく日本語で行われ、実体験からかなり日本語力は涵養できると思われるが、日本文化教育の充実ぶりに比して、日本語教育への比重がやや軽いのではないかと懸念される。

3. 総合日本語コース

留学生センターが提供する教育プログラムの増加に応じて日本語コース数を増やせば、より学生のニーズに合った日本語教育が提供できる。しかし、先にも述べたように教育活動には様々な制限があり、苦しい対応を迫られることが多い。金沢大学留学生センターは、その悩みにある解決法を見いだしている。それが、総合日本語コースである。P.73に「本コース設置のきっかけは短期留学プログラムの立ち上げにあり、短プロ用の日本語コースを新設する余裕がなかったため、全学補講を見直し、初級の日本語研修コース以外の金沢大学に在籍するすべての日本語学習者を対象とした「総合日本語コース」が創られた」(評価者要約)とある。短プロ生、日韓生、日研生、日本語研修コースの初級修了者に加えて、学部生、院生、研究員など、学習目的の異なる全学の日本語学習者を一つのコースに吸収し、日本語のレベル別に教育をしようとするものである。教育上の課題は多いだろうと推測するが、この試みは、現在のニーズベースで行われている日本語教育の可能性を広げるのではという期待を抱かせる。また、コースを増やすよりはレベルを増やすほうが、確かに運営面から見て、人的にも財政的にも対処しやすい。しかし、総合日本語コースは、もともと経常的な予算が確保されていない「補講」を教育的に見直したものであり、財政的な不安は変わらない。今後このコースを強化しようとする、専任教官の負担増に頼らざるを得ないという問題が生じる。追加資料の p.2 にあるように「総合日本語コースの中の技能別クラスのいくつかは、教養的科目の言語科目(日本語 B)としても開講されている」ことを突破口に、各部局と交渉をして単位化を実現し、全学に対して単なる留学生へのサービスという任務に終わることなく、大学の実質的な教育機関としての負託に応えるよう教育活動が活発に行われることを期待している。

この他の教育活動として、日韓共同理工系学部留学生コース、短期留学プログラム、教養科目としての日本事情などがあるが、それぞれのプログラムも上に述べた 3 つのプログラムと同様、所期の目的を達成するよう着実に運営されていると思料される。

様式 B

金 沢 大 学 留 学 生 セ ン ター 外 部 評 価 報 告 書

委員 古城 紀雄

特記事項：評価委員の専門分野に関する詳細な評価及び意見

○ 相談指導部門の活動

本部門に課されている業務は、(1) 留学生交流の円滑化・推進のための環境整備、(2) 留学生への指導助言、(3) 日本人学生の海外派遣留学の推進、(4) 前項までの諸活動を基礎的理論的に支える研究・調査、の4項目であるとされている。

(1) については、各留学生の指導教官や共に生活する地域住民との間のコミュニケーションの活性化および相互理解の進展に特に配慮している活動実績が示されている。また、手続き上の問題やクライシス（健康を損ねた場合も含む）に適切に対応するためのオリエンテーションなどが具体化され、それも、部局の指導教官、留学生専門教育教官や保健管理センターのスタッフとの協調体制にも格段の配慮がなされて実施されている。(2) については全学的な対応が必要な場合を中心として正にセンターとしての対応を行っており、一方で、各部局での対応の相談内容にも目を配りつつ、チューター制度の活用や日本人を中心とした共生グループの活動支援を通じた方向付けをも行っている。(3) に関する活動では『金沢大学留学ハンドブック』の作成に加え、各種媒体を用いた情報提供を行ってきた。ことさら金沢大学生のみならず、日本人学生の海外留学への意識の低さが根底にあるとはいうものの、抜本的にこの状況を改善する方策の検討・具体化が待望されている。(4) で対象となる調査・研究活動については、査読論文から社会貢献的要素の強い「地域国際化に係る啓発・啓蒙活動」まで、幅広く精力的に取り組んできており、全国的にも抜きん出た成果の蓄積を感じることができる。

金沢大学に学ぶ留学生が学内外でのコミュニティにおいて自然な形で生活し得る環境がより整備されてゆくことをしっかり念頭に置いた活動が精力的に展開されている実績は高い評価を得るに十分である。

一方で、スタッフの数的には決して恵まれているとはいえない状況で、今後はさらに、指導受入れ教官、部局のスタッフ（留学生専門教育教官を含む）、留学生課スタッフ、そして地方公共団体、地域ボランティア、留学生との共生活動サークルなどの活動と連携しつつ、部門としては「どの活動・方向を重点的に創成・実施してゆくのか」について整理し、従前の活動内容についての支援もしくは主体移行などを協議しつつ、限られた人的資源の中で決してサービス低下とならない流れの体制作りも期待されていよう。

○ 時代の中のセンターのあり方・ビジョン

法人化を控えたこの時期に留学生センターのあり方・ビジョンを論ずる機会を持つことは意義深い。すでに自己評価書には中期目標・計画をもとにした構想が記述されていて、その具体的方向付けの迅速さに敬服するところである。

提供戴いた資料の内容の限り必ずしも明確ではなかったが、中期目標・計画の内容がどのような検討過程を経たのか、さらには新設される「国際室（仮称）」と「国際教育交流部門」の構造上の関係、「教育・研究・指導に関する構想」での広範囲な内容のどの程度が、センター内での、そして、学内全体でのコンセンサスを得ているのか、等についても関心の寄せられる点である。更に、そもそも、「国際室」「国際部」がどのような理念で創設されたのか、については、それに基づいて各構想でいう具体的計画が発意される根拠を与えることになるのでこの点も興味深い。もとより、この議論・検討のプロセスはひとり「留学生センターの評価に伴う議論」にとどまらないことだろうが、この時期にそのプロセスを検証して示すことは法人化を控えた各大学の参考となることは間違いないと考えられる。

○ 留学生センター施設の改善・将来構想の具体化への期待

今回の外部評価に係る資料の内容、ヒアリング及び現況施設等の説明・視察を終えた段階で、

センター施設・設備状況に関する評価は決して高くはないとの判断が妥当であろう。断片的には評価報告会の記録を参照して戴くとして、狹隘のみならず、そう近くはない建物に分散した状況、センター長の机という象徴的な措置は、もしこの状態がおよそ8年間も継続されてきたことであれば理解を超えていると言わざるを得ない。幸い各種教育・研究活動がこの状況にもかかわらず多大な成果を蓄積していることでまことに救われることであるが、そのためのセンター教官、非常勤講師の方々のコミュニケーションの確保や連携のために、物理的に余分なエネルギーを費やしていることであろうと推察する。

まだ学内コンセンサスを得ていないながら、留学生センター部分を総合教育棟に集約・機能化する方向で、大学執行部が抜本的にこの状況を改善する流れを構築されていることもよく認識できたが、それが予定通り具体化することを強く期待させていただく以外にない。

様式 B

金 沢 大 学 留 学 生 セ ン ター 外 部 評 価 報 告 書

委員 細川 英雄

特記事項：評価委員の専門分野に関する詳細な評価及び意見

(ページ表記は、『金大キャンパスの国際化を考えるー金沢大学留学生センター自己点検評価ー1995.4～2002.9』による)

委員の専門分野は、日本語教育であるが、グローバルな視点からの留学生教育への評価という
ご依頼もあり、この点も踏まえて意見を述べることにする。

留学生教育の問題は、留学生センターの組織・管理運営にとどまらず、大学全体の問題である。
各部局との相互点検システムによって、それぞれの部局の問題点も浮上するし、大学全体として
の留学生教育への取り組みの力点や特色も明らかになる。

留学生センターの目的が「全学の留学生向け日本語教育」(p.1)とあるように、部局ごとの留学生
とその内訳、また問題とその解決がどのように行われているかを明示することが必要だろう。

その意味で、「国際部」(仮称)の設置の将来構想は、重要であろう。留学生センターにとどまらな
い、大学における留学生の受け入れ及びその教育の全体像を横断的に見渡すことによって、諸問
題の解決に資する制度や方策の実施が望まれる。

教育活動に関しては、総合的なカリキュラムによって多彩な教育活動が行われている点が評価
できる。とくにプロジェクト活動や地域との交流に力点がおかれ、独自の教育システムへの配慮
が見られる。ただ、伝統文化や現代日本社会の見学によって、「日本事情」科目としての意義も認
められるが、そのことが日本語教育とのリンクをどのように位置づけるかが教育活動としての課
題だろう。

とくに、留学生の地域交流は、留学生教育にとって重要な視点であり、その活性化への方策が
望まれるが、ややイベント的なものが目立つようである。できるだけ継続的であることが望まれ
よう。また、そうした地域活動それ自体への評価を明確にし、単なるイベントで終わらせない努
力が必要だろう。そのためには、できるだけ多くの情報の共有化のための内容公開が不可欠であ
ろう。

金沢には、かつて「金沢を世界に開く市民の会」が存在し、地域の日本語教育のために先進的な
役割を果たしてきた歴史がある。1990年までの「留学生教育センター」では、こうした地域のボラ
ンティアの方々との連携を重視し、留学生センターの非常勤講師として迎えるほか、定期的な研
究会活動によってその質の維持に配慮していた。こうした財産を受け継ぎつつ、地域との交流及
び連携に努めてほしい。

教育活動との関係では、教育実践に関する理念や方法論を追求する分野への研究が求められよ
うし、地域との連携等を踏まえた教育活動が盛んに見られる中で、社会・文化のための日本語教育
に資する新しい考え方等を視野に入れた研究が望まれよう。また、そのためには、日本語教育に
関する科学研究費申請・受託やその他の外部資金の導入が不可欠であろう。

とくに日本人との交流に関して、積極的な参加を促す方策のための具体的な試みを示してほし
い。学内共同教育研究施設の留学生センターとして「外国人留学生及び海外留学を希望する金沢
大学の学生に、必要な教育および指導助言等を行う」(p.1)とあるが、留学生の受け入れと日本人
の送り出し双方の連携をどのように進めるかが問題だろう。留学生と日本人という2項対立では
なく、ともに学ぶ場を提供する必要があると考えられるが、そのための大学としての具体的な方
法を提示されたい。

総合大学における日本語教育は、単に専門教育への橋渡しといった発想ではもはや立ち行かな
いことが自明である。また、それぞれのプログラムが独立的に運営されることはある程度はやむ
をえないことであるが、言語教育の立場から考えれば、本来、一元的に管理・運営され、その教育
理念がカリキュラムに繁栄されるような学習システムを構築することが望ましいと考えられる。
役割分担による仕事の棲み分けもさることながら、センターのスタッフが協働してつくりあげる

日本語教育の姿が望ましいだろう。すでに実施されている学部・大学院生対象の日本語教育カリキュラムは、まさにそうした一元的システムの端緒といえるものであろう。

今後、センタースタッフの合意を形成し、日本語教育についての何らかの理念を掲げ、そのもとで、どのような教室活動が可能なのかという方法の模索が必要であるように思われる。

もちろん、こうした教育・研究環境のためには、固有の占有施設が不可欠であろう。留学生教育は、多人数の一斉授業になじまない性格を有しており、そのためには固有の教室や共同作業等の空間が必要である。留学生センターとしての意思決定を明確にし、その理念の下で他部局への働きかけを行いつつ、全学での発言力を増すことによって、金沢大学の留学生教育がますます発展することを期待するものである。

5 おわりに

金沢大学および留学生センターがキャンパスの国際化に向けた取り組みを精力的に進めていることが今回の外部評価を通してよく分かった。留学生センターは多様な活動を展開しており、その活動の中には他大学の参考になることも少なくない。このような情報が得られたことは外部評価者としてありがたいことであった。

各委員の報告の中には、施設拡充計画の推進、研究活動や社会連携の強化などに期待するコメントが含まれている。このような課題に取り組むことで金沢大学留学生センターの評価はなお一層高まるであろう。

本年4月から独立行政法人に移行するが、キャンパスの国際化は全国の大学の課題であり、留学生センターの果たす役割はますます重要になるものと考えられる。金沢大学留学生センターが全学的な支援のもと、これまでの実績を踏まえて全国屈指のセンターとして発展されることを願って、本報告の結びとする。

6 外部評価報告会記録

金沢大学留学生センター外部評価全体報告会

(平成15年12月6日開催)

金沢大学留学生センター外部評価全体報告会

日時 平成 15 年 12 月 6 日（土） 15 : 00 ~ 17 : 40

場所 事務局大会議室（6 階）

（三浦） 皆様、本日は 12 月の土曜日、貴重なお休みの日に、このようにお集まりいただきましてありがとうございます。それでは、ただいまより金沢大学留学生センター外部評価全体報告会を開催します。

外部評価委員の先生がたをご紹介します。手前から、早稲田大学の細川英雄先生、大阪大学の古城紀雄先生、名古屋大学の尾崎明人先生、東京農工大学の越前谷明子先生です。そして、こちらは留学生センター長の中山先生です。

それでは、副学長の畑先生よりご挨拶をお願いします。

（畑） 畑でございます。本日は土曜日、しかも 12 月に入りまして、先生がたもお忙しいところご足労いただき、留学生センターの外部評価に当っていただきまして厚くお礼を申し上げます。本学は平成 7 年にセンターが設置されまして今日に至っているわけですが、自己点検評価を 14 年度に行いまして、初めて今年、外部評価をしていただく運びになったわけです。

本学の留学センターは、一つのセンターとして「独立」しているわけではなく、もちろん独立はしていますが、全学共同利用施設ということで、各部局からセンターの活動が注目されているところであります。

我が国における留学生の受け入れが 10 万人構想を達成したということで、今後は、これまでの量的な拡大から質的な充実へと、それが今の課題になっているということも伺っています。本学においても約 360 名程度の留学生、毎年その程度を受け入れているわけですが、いかんせん日本人学生が海外に留学することについては非常に弱いということで、評価の中でもそういうご指摘を頂いています。そういう点を今後本学に課せられた課題として、早期にこの課題を達成していかなければいけないと考えています。

また、留学生と日本人という対立ではなく、共に学ぶ場を提供する方向を考えなければいけません。伺いますと、全国の各大学でも共通の課題になっているやに聞きますが、留学生は留学生、日本人学生は日本人学生という形で、せっかく留学生を受け入れたにもかかわらず、日本人学生との交流が非常に少ないのではないかとのご指摘です。これにつ

いては私も常々考えています。この4月に設立されました大学教育開発・支援センターがありますが、今度、ここの学生支援部門の仕事を担うことになった先生が、留学生と日本人学生との交流の場を総合教育棟に設けて、恒常的に両者が交流できる企画を今、考えてくれていますので、先生がたのご指摘を受けて、そういう方向で取り組んでいきたいと考えています。

いずれにしても、先生がた、本日は本当にたくさんの評価を頂きました。この評価を基にして、今後、本学の留学センターの充実を図っていきたいと思います。特に細川先生は、このセンターの立ち上げを準備していただいた先生ですので、改めてこの場をお借りしてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(三浦) 畑副学長、ありがとうございました。それでは、この外部評価に至った経緯を中山センター長から説明いたします。

(中山) 先ほど畑先生からもありましたが、昨年度、自己点検評価を実施して、それを受けて外部評価を今年度行うということです。皆さんのお手元に「金大キャンパスの国際化を考える」というセンターの自己点検評価が配付してあります。それから、これは平成14年9月までのものですから、さらにその後追加になったデータも追加資料として配付してあります。これ以外にも、留学生センターに関する冊子・ハンドブック等いろいろな資料をお送りしまして、まず書類による評価の報告を受けています。それに基づいて、今日の朝9時から11時ごろまで施設等の説明を行い、視察をしていただきました。その後、11時から2時半まで、お昼を挟んで疑問点等についてのヒアリングを実施しました。これらを踏まえて、今から皆さんに報告会を行いたいと思います。本来、私は評価を受ける立場の人間なので、司会は別の人のほうがいいのですが、進行係に限定して進めさせていただくということで了解を頂きたいと思います。

この報告会の進め方ですが、外部評価委員のかたと相談をしました。まず、全体的な評価に関して評価できる点、あるいは改善を要する点等について各委員から報告をしていただきます。その後、7項目にわたっての評価のお願いをしましたので、その項目ごとに評価委員のかたから報告を頂き、それに対しての皆さんからの質問を受け付けたいと思います。

それでは、報告会を始めさせていただきたいと思います。先ほども言いましたように、

全体的な評価ということで、各外部評価委員から5分程度、評価できる点や改善を要する点についてご報告をお願いしたいと思います。

(細川) では、まず私から感想をお話したいと思います。分野として、グローバルな立場からの留学生教育という観点から評価をさせていただきました。まず金沢大学の留学生教育は、ある意味では非常に総合的に行われているという点で評価できると思います。一般的に、留学生教育は大学の国際化を映す鏡であると昔からいわれていますが、そういう意味で、北陸で早くセンターを立ち上げたということもありますし、留学生教育に対していろいろな方法を講じているという点が評価できると思います。具体的には、後のそれぞれの項目に沿って意見が出されると思いますが、教育及び研究という点、そして全体のセンターのあり方の点について、私の感ずるところを述べさせていただきたいと思います。

教育に関しては、総合的なカリキュラムが組まれており、多様な教育活動が行われていると評価します。特に地域との連携、あるいはプロジェクト活動等には見るべきものがあると思いました。ただ、地域との連携は、特に金沢市の場合には地域の日本語ボランティアの歴史が昔からありますが、これがどのように生かされているかという点にやや曖昧なところがあると思いました。金沢という地域に限定しますと、伝統文化という点が特徴ですし、それが同時に現代社会、日本の一つと位置づけられます。その辺を大学の教育プログラムとしてどのように生かしていくかという点が、これは金沢だけの問題ではなく、日本中の問題でもあります。そういった言語と文化の問題をどのように考えていくかという点に少し見え難いところがあると思いました。ただ、それが同時に、先生がたがなさっている教育とも連携していて、研究と教育の連携といいましょうか、教育と研究の結びつきといいましょうか、少しずついろいろな共同研究もなさっていますが、具体的には日本事情と日本語教育をどのように結んでいくかという点がより明らかになると、今言ったような地域との連携というテーマが、金沢というところを基にしながら明確になっていくと思います。

先ほど畑副学長のご紹介にもありましたが、留学生教育というと、留学生を抱え込んで、留学生に手厚くする一方で、どうしても日本語母語話者と日本語非母語話者の対立を生みがちです。これは金沢だけの問題ではなく、日本中の問題でもありますし、ある意味では世界中の問題でもあります。母語話者と非母語話者の対立を越えるところから本当の意味の国際化が始まると私は考えます。そういう意味で、これは留学生教育というよりも大

学教育になると思いますが、どうやって留学生と日本人の境をなくしていくかという形で留学生教育が望まれていくと思います。その点に関して、金沢独自の方法が具体的に提示されていくと、日本の中でも先進的な役割を果たしていけるとと思います。

あと幾つかありますが、まとめのような形で申しますと、学内共同利用機関としてのセンターとしての役割と同時に、私は、やはりセンターとしての自立性も必要だと思います。したがって、センターとして自立した運営をどのようにして行っていくのか。それは同時に、大学全体に対してセンターがどのような発言力を持っていくかという点にも大きく関わっていく問題だろうと思いますので、その点に関しても留学生センターの活躍を期待したいと思っています。

(中山) ありがとうございました。古城先生、お願いします。

(古城) 今朝から、施設見学も含めて、金沢大学留学生センターが置かれている状況、あるいは活動されている現状を見せていただき、また、立派に自己点検評価書を発刊されている内容を基に、私なりの簡単な印象をまず述べたいと思います。

ご承知のように、法人化を控えて、各大学はどういう戦略で自分の大学を特徴づけ、魅力ある大学と世の中にアピールしていくかということに苦心しています。中でもほとんどの大学がいつていますところの国際化、あるいはそういう交流活動を促進していく流れについては、私自身が特にとやかくいうことではありませんが、本金沢大学におかれても、世界に開かれた研究、教育ということで明確に示されていると思います。ただ一方で、何のためにそうしていくのか、あるいは、どういうことを最終的な目標として、そのことをしていかなければならないのかということも同時に考えていかなければならないと思っています。これは特に議論をしているわけではなく、フリートーキングのようになりますが、やはり従前からいわれていますように、その大学が活動を通して魅力的でなくてははいけないという意味では、留学生センター、ないしはそういう関係者の努力で、国際交流活動、学生交流が盛んになることによって、そこで育つ大学生、大学院生が豊かな資質を持って世の中に出ていく。そして、とても有用な人材として育成されたという評価を得ていかなければならない。そういう観点は、しっかりと見据えていかなければならないと思っています。そういう意味で、留学生センターで留学生をたくさん受け入れた、語学教育がうまくいっている、地域と連携しながら地域の国際化にも貢献しているという面も大事ですが、

金沢大学の学生さんや院生さんが、その活動でどのように意識改革をし、どのような力をさらに付加されているのか、そしてどのような人材を世の中に皆さんが送り出そうとしているのか、そういう観点での戦略的な流れがやはり必要であろうと考えながら聞かせていただきました。

現状の施設等を見せていただいた印象でいうと、保健管理センターが留学生課等の建物のすぐそばにあって、恐らくそこでの連携も非常に緊密なのだろうなということが感じられました。留学生センターの先生も、そこに貢献をされていると聞いています。それから、図書館に行きましたら、留学生用の書架があって、なかなか高価で買えないような本をたくさん揃えて留学生に貸し出している。「Books for international students」と書いてありましたから、日本人学生もいいのだろーと思います、非常に整備された感じを持ちました。その中では、当然、中国語や韓国語のワープロ等も整備されているということで、きめ細やかな、留学生課の方針もあるのですが、事務的な体制も含めて、図書館あるいは保健管理センターが留学生センターの活動の支援、あるいは協調体制を執っている印象を非常に受けまして、いい印象を持った次第です。

併せて大学会館、あるいはゲストハウス等も見せていただきました。いずれにおいても同様の印象でした。ゲストハウスに入っている人と入っていない人の差もあると思いますが、そこでは、いろいろな日本文化に触れる企画なども活発にやられているようですし、どちらかという使いやすい国際交流会館といえますか、そういう形として整備をされているということも非常によく分かりました。

現状のインフラ整備が、そのように非常に厚意に基づいた、あるいは留学生課の適切な予算配置に基づいた形で、学内的な、組織的な動きを構築しているという印象に加えて、これは外部評価のことですから、少し他の面もいうという意味では、ちょっとがっかりした面もありました。留学生センターに非常勤講師の人がいろいろと情報を取ったり準備をされる調査研究部という部屋ですが、あの部屋の乱雑さです。ある意味では、物をたくさん置かなければならないという必然的な状況の中ではしかたがないのかなと思いながら、整理整頓の次元をこえて、基本的にそのスペースが枯渇していることは明白であると言わざるをえない。協力をされている図書館や保健管理センター、ゲストハウス、大学会館の流れを見たときに、非常に残念であるという印象をこの部屋に感じた次第です。

併せて、日本人学生と留学生とを区別なく、金沢大学の学生、院生であるという形で捉えている、それは大変結構なことで、それに越したことはないのですが、その場がありま

せん。「場がない」と言い切ってしまうと、「いや、ある」といろいろな反論も出ると思いますが、少ないといいましょうか。確かに、ゲストハウスの多目的室等はそれなりの効果を上げていて、KISSという学生ボランティアグループの活動本拠にもなっているようですが、基本的に留学生課や留学生センターがどこかにまとまった形であって、もっと日本人の学生も外国人学生も一緒に金大の学生、院生として集う、あるいは情報を取れる場所が早く整備されなければならないと思います。それは、何か年計画などは待ってられないような状況であると評価をさせていただきます。このことは、総論では美辞麗句が並べられても、実際に大学全体でそのことをどのように具体化しようとしているかの確認を留学生センター自身が行っていかねばいけないことと、一方で、留学生センターの組織がそのことの切実さと実情をどのようにして働きかけていくかを考えなければいけない。

留学生センターが法人化を迎えて、どういう戦略の一翼を担っていくかということについて最初に述べましたが、ここで若干それに戻って、最初の話を終わりたいと思います。先ほど来言っていますように、明らかに日本人学生、自分たちが育てる人材のためにそうしているのであって、受入数を多くするためにしているのではない。ましてや留学生がよい教育であるとか、留学生がよい評価を与えるようなプログラムをたくさん作るということではないのです。もちろんそれに越したことはないけれども、そういうことではなく、やはり留学生の日本語教育でいえば、これはヒアリングでも言いましたが、指導教官、学部、研究科の先生に「よくぞここまで協力してくれた。」と、いってみればお礼を言うというか、そういうふうな認識をしてもらうような評価体制を作ることこそが大事なのです。話せなかった留学生が話せるようになって、感謝をするのは当たり前とさえ思っています。

そういう観点で、大きくは、そのようにお願いしたいのですが、さりとて日本語教育部門、あるいは、そのほかの部門の活動を見せていただくと、これ以上時間がないというほど密に、そしてまた、多彩なプログラムが展開されています。こういう多彩さと、それぞれが、よく考えられた機能を持って提供されている実情を見てみると、これは結構ほかの留学生センターがそれに倣うことは大変だと思うくらい、トップクラスの実績を上げていると思います。そのことについては本当に敬服します。ただ、問題として、「それでいいのですか」ということもあります。ある意味では、多彩なプログラムと多様な教育の積極的展開を標榜するというか、アピールしていただくだけでいいのでしょうかということがあります。また、後ほどお願いしたいところの留学センターが、さらに学内の学部、研究科、あるいは執行部に認知されてゆく流れに対して、それだけでは必ずしも有効ではないとも思

います。

いずれにしても、平成7年に留学生センターができました。実は、大阪大学は平成6年にできています。1歳だけ年上ですが、とてもかなわない多くの実績を上げておられるということで、そのことについては本当にそういう評価のもとに、以後、ご活躍していただきたいと思います。最初の話はこのくらいにさせていただきたいと思います。

(中山) ありがとうございます。尾崎先生、お願いします。

(尾崎) 名古屋大学の尾崎です。私も留学生センターに所属して、日本語教育を担当していますので、先生がたのご苦勞は、まさに自分のことのように感じられて、外部評価ということ自体もどういうスタンスですのかと、悩んでいます。まず、評価疲れという言葉が大学の中でよく聞かれています。ほかの部局からも、立派な自己点検評価報告書が来ます。金大からも立派な報告書が送られてきて、これを作るまでにどれだけの時間をかけられたのかな、これのために何十回のミーティングをしたのかなと身につまされてしまいます。

身につまされるというのは、実は我々も同じようなことをやってきているからです。名古屋大学では95年に留学生センターができています。そして、5年めに自己評価をやりました。そのときは学内の部局長の先生4人と副総長に来ていただいて、公開の内部の外部評価というものをやりました。それから10年めに今度は外部評価ということで、ちょうど昨年12月20日過ぎに今回のようなことをやり、今年の3月に報告書を出しました。とにかく疲れました。でも、終わってみて良かったなというのが実感です。

どうして、そういうふうにしたかという、日ごろは、日常的な教育活動に追われていて、落ち着いて振り返ってみる時間がなかなか取れません。取ろうとしないといったほうが正確かもしれませんが、あまりそういう時間を取ってきませんでした。もう一つ、私の職場の場合は日本語教育の部門、指導相談の部門、短期交換留学の部門と、それぞれ、かなり独立性が高く、それぞれが仕事をやっており、お互いのことをじっくり話し合う時間がありませんでした。情報交換は日常業務のレベルではやっていましたが、自己評価をすることでお互いにやっていることを認め合う場ができて、センターとしての一体感が強くなったと思いました。

自己評価も外部評価もやるプロセスで随分メリットがありました。しかも、やった後で、

いろいろコメントがいただきました。例えば、短期交換プログラムのようなことをやるのであれば、当然海外の、特に留学生受入先進国、例えばアメリカのような受け入れ国のプロの評価を受けるようであれば、これはお手盛りの外部評価といわれてもしかたがないとおっしゃった先生がいて、この次は海外から呼ぼうと思っていたら、金大が海外から呼んだので、先にやられちゃったという感じもあったのですが（笑）。しかし、我々がついつい見落としていたことを外部評価では指摘してもらいました。日本語教育に関しては、日本語の先生は頑張っているけれども、意外と自分たちの中ばかり見ていて外が見えていないという批判もありました。それから、独法化以降の大学のあり方を見ていったときに、語学教育も含めて大学で教えるべきこと、それから外に出すべきことという仕分けは当然起きるはずで、そういうことについて日本語の先生たちはあまりにも見えていないという批判も受けました。そういうことを改めていわれてみると、悔しいけれど、それはそうだなと思わざるを得ない面があります。そういうこともあって、評価疲れでうんざりすると同時に、やって良かったなど。それを基にして、この次の外部評価でもっとしっかりやろうと今は言っているのですが、まだ疲れが尾を引いています。

今回、金大の先生がたが自己評価報告書をお作りになって、今日も午前、午後とヒアリングがあって大変お疲れだと思いますが、これをぜひ生かしていただけたらいいなと思います。以上は、評価ではなくて、むしろ評価をすることについての私の感想というか、経験談になります。

さて、報告書のタイトルは「金大キャンパスの国際化を考える」です。これは留学生センターだけの問題ではなく、むしろ大学全体がこの問題をどう考えるかということの中で、センターがどのような役割を果たすかと、そういう観点の評価をすべきだと思います。センターの教官スタッフは9人しかいません。留学生というと留学生センター、留学生教育というと留学生センターということになるのですが、これは、本当は大間違いだと私は常々言っています。留学生教育というものは、留学生を指導して学位を授与する、それぞれの学部研究科の責任で行われているはずです。したがって、留学生センターでやっている活動は、学位を取るという留学目的がうまく達成できるように下支えをする仕事だと思います。あるいは短期交換留学の場合、いろいろな目的を持って1年間大学で勉強をする学生がいるわけですが、やはり、これも大学全体が支えていく、その一部を留学生センターが担うはずですから、当然、大学全体がどういう方向で、これまで何を具体的にやったか。そのこととの関わりで留学生センターはどういう貢献をしてきたか。貢献すべきであ

ったにもかかわらず、まだできていないことは何かということで評価をされなければいけないと思います。特に、指導相談部門の報告を拝見すると、いわゆる留学生の学習面での相談が多いということが出ているわけですが、こういう問題は本来、指導を引き受けている学部あるいは学科、講座が責任を持ってやるような事柄であって、専門ではない留学生センターの教官がそういう問題を持ち込まれてどうやって解決していくのかと。とても大変だなと思います。

第2点目、全体的なこととしては、頂いた報告書を見る限り、金沢大学の全体像が見えないとお話ししました。そうしたら、早速資料が頂けました。平成8年に金沢大学の基本理念、目標が作られていて、すでに第3次の具体的な計画が進んでいる。その中に国際交流事業の推進に関わる4項目、さらには具体的にこれをやるぞということが書かれていて、やはり金沢大学は進んでいращやることがよく分かりました。ただ、この種の文章は具体性がないので、個々の施策について具体的にどういうことがあったか、そこを含めて留学生センターの活動を評価しなければ、これはセンターにとってアンフェアであるというのが私の立場です。

そういうふうに言ってしまうと、「では、おまえは外部評価委員会で、どういう立場で評価するんだ。」と聞かれてしまいましたが、一つには自分自身が日本語教育を専門としていますので、センターの日本語教育について関心を持って読ませていただきました。9名のスタッフのうち、実質的に日本語教育をやっている先生がたは、それよりも少ない。その限られた教官数で、6種類の違ったタイプの学生の教育をしていращや。しかも過去7年間、いろいろ工夫をして教材を作ったり、プログラムの見直し等をなさっていることがよく分かりました。自分自身の職場での活動、ほかの留学生センターの様子などを個人的に聞いた限りでいえば、金沢大学の留学生センターの日本語教育は立派である、5段階評価で5と言っていいと思います。それから、指導相談部門については、実質的には担当の先生は一人だと思います。ところが、活動の種類がとても多い。非常に多様な活動に取り組んでいращやいます。この点でも、私は5段階評価の5だと思っています。5をつけることの意味ですが、限られたリソースを使って、やれる範囲内で目一杯やっているということです。

そして、この次に問題になることは、では、その限られたリソースを使って今後何をやるべきかということです。これは今回の評価ではなく、次の評価でテストされることですが、そしてすでに、この先どうだという議論がある程度は内々になされているはずですが、

そういったことが自己点検に入っているだけでも良かったかもしれない、その点があまりはっきり見えないという感じはします。

特に、そのことを感じるのが、地域に対する貢献です。すでに、文科省の地域貢献特別支援推進事業で2年前から予算がついて、それを留学生センターが主体的に申請をして、金沢学のコースを作られた、これは非常に評価できると思います。ただ、この予算は継続的に文科省から取れる保証はないので、予算が途切れた途端に外部の人が呼べない事態になるでしょう。そのときに、センターとしては、限られた三千数百万円の予算で一体どこまでこういった事業を続けていけるのか、大学としてどのようなバックアップが行われるのかということがあると思います。主体的に地域貢献のための予算獲得に進まれたことは大変素晴らしいことで、これは評価できると思いますが、さらにもう少し考えていくと、そもそも日本社会がどういう方向に動いていくか。日本の社会が変容していく中で、留学生センターの先生がたが、それぞれ専門になさっている仕事をどういう形で、大学の中だけではなく、外に還元していけるのか。そういった問題意識をもっと明確にお持ちになって、次の自己評価、外部評価に臨まれるといいのではないかと思います。

それから、地域だけでなく、実は大学も一つのコミュニティです。キャンパスの国際化は全学の課題ですから、留学生センターとして、どういう形で他部局の先生がたの理解を得ていくか、これは古城先生がおっしゃったこととつながっている問題だと思いますが、そういったことも少しずつ意識してやっていかなければならないと名古屋大学でも話をしている状況です。次の自己評価の時には、そういったことへの取り組みも入れていくといいと思っています。

全体的には、本当によくやっていらっしゃるというのが私の印象でした。

(中山) ありがとうございます。

それでは、ご紹介が遅れましたが、公務で忙しい中をお願いしていますので……。今、参加をされました、金沢市教育長の石原多賀子先生です。

(石原) 遅くなりましてすみません。よろしくお願いします。

(中山) それでは越前谷先生、お願いします。

(越前谷) 東京農工大学の越前谷です。本学には留学生が340~370名ぐらいいます。日本人学生を含め、多くて5000人ちょっとの、金沢大学に比べるとはるかに中小の大学に属するところの留学生センターにいます。大阪大学とは同期で、平成6年に設置されました。今、大体10年ですが、学内あるいは学外、いろいろなところでの活動で、どうしてもセンターが越えられない壁といいですか、目に見えない壁に当たっています。各センターにもいろいろな課題があると聞きますが、この自己点検評価を読ませていただいて、「金沢は凄いな、私たちが当たっている壁を越えているな」と思ったところが三つあります。

その一つは、今、尾崎先生の話にもありましたが、学内の専門教官の協力を組織化しているところです。私どものような小さい大学で、ほかの学部の先生に科目提供などをお願いしますと、「僕はもうこれでいっぱいだ。留学生の面倒を見る時間はない」と言われるので、そこを何とかお願いしますと説得をかさねなければ、なかなか協力が得られないということがあります。センターの先生がた、あるいは留学生課の皆さんの努力があってこそとは思いましたが、それにしても考えられない数の専門教官からの留学生のための科目が提供されていると思います。これは、金沢大学のほかの部局の先生がたが留学生センターをある点できちんと評価している、つまり留学生センターをサポートしていこう、あるいは留学生センターと一緒にいい仕事をしていきたいということの表明のように私には思えます。その意味で、大変そこところは評価ができます。そして、それを上手にというか、適切に組織化していらっしゃるセンターの皆さんの力に大変感銘を受けました。

もう一つの壁ですが、これは地域の人々です。金沢というところは本来、大変文化的な素養の高い都市です。ある意味で、外国人にそういうものを広めよう、あるいは外国人に知ってもらおうという強い気持ちがあるのかもしれませんが、やはりこれもセンターが持っている組織力できちんとカリキュラム化し、取り込んでいくということは素晴らしいと思います。私の大学では残念ながら地域的な交流はほとんど行われておらず、もちろん国際理解ということで地域の学校などにも行っておりますが、こういう形でカリキュラムの中に、あるいは支援事業の中に、きちんと地域の人を取り込んでという形では行われていないのです。

もう一つは、組織やカリキュラムを弾力的に変えていらっしゃることです。例えば、新部門を作って、専任教官を一人増やす、あるいは相談指導部門でも、センターではありませんが、工学部などでサポートをしてくださる方をちゃんと手当てしていらっしゃる。それから、古城先生のお話もありましたように、例えば図書館と留学生課、あるいは保健管

理センターとセンターとの協力体制が取られ、人が少なければ、人が少ないのでこのところは何とかしてというように、きちんと組織が少しずつ変わっていけるということは素晴らしいことです。変わるためには財政的な裏打ちもなければいけないし、大学全体の人配分のようなこともあるでしょう。そういうところがセンターで実現できるなんて、羨ましい限りです。

私はセンターの日本語教師をしていますので、後で、教育活動のところで報告をさせていただきますが、そのほかの点で一つ、これだけは言わなければならないと思うことは施設です。私どもでは、センターができて10年がたちますが、やっと来年の4月に、工学部の総合棟の中に面積1300平米の留学生センターの建物が造られることになりました。「なぜ留学生センターは建物、建物とよく言うのか」と、学部の先生によく言われるのですが、考えてみると、学部の先生には初めから建物があるのです。自分の研究室がないとか、自分が講義をする部屋がないということは、学部の先生は恐らく経験がないのです。わたしの大学では研究室が、てんでばらばらに、こっちに一人、こっちに一人と分散されていて、共同研究や教育の指導の打ち合わせを行なうのにも大変困りました。個人的、研究室単位での色彩の強い専門の教官群よりも留学生センターの教育研究は、はるかに連携機能が重要であることは皆様に理解していただけることと思います。建物がないということはアイデンティティがないといえますか。建物はアイデンティティを作っていくための基本的な条件のように思うのです。先ほどの時間の中で、センター建物を造ると、ある意味で教官や留学生をそこへ閉じ込めてしまうような気持ちを持つこともあるかもしれないという指摘がありましたが、実際は、そういうことは絶対にありません。センター教官は忙しく、多種の仕事をやっているわけですから、そこに閉じこもることはまず考えられません。また、日本人学生と留学生との機能的な交流の場としてもセンター建物は必要と考えます。先ほど古城先生がおっしゃっておられた非常勤講師が利用される調査研究部という部屋ですが、私のように日本語教育をやっている者から見ると、一生懸命にやればこうなるよねと(笑)。多分、みんな目をテンテンさせてやっているから、こうなってしまうのだと思いました。理想的には、非常勤と常勤と一緒に授業の準備ができたり、新しい教材を作ったり、あるいは、カリキュラムの変更などを、同じ立場で自由に話し合える具体的な場がやはり必要です。どうしても場が必要なのです。これを読ませていただいて「ああ、専有の建物がないのか。それなのにどうしてこんなに仕事ができるの」と、改めて皆さんの努力と間断ない向上の気持ちに対して、私は本当に頭が下がる思いですし、同僚として大変素

晴らしいことだと思います。本当に、今回、外部評価をさせていただいて、いろいろな勉強をさせていただきました。ありがとうございました。

(中山) 石原先生、お願いします。

(石原) この「金大キャンパスの国際化を考える」という自己評価の報告書を拝見して、非常にたくさんの資料で、これだけたくさんの仕事をしているのだということを改めて認識しました。ただ、内部だけの資料であればこれで分かりやすいのですが、留学生センターの存在の社会的な認知度を高めることが私は自己点検評価の基本的な一つの方向性だと思うので、そうした場合、今やっているカリキュラムの現状と資料編、また、それに対しての学内留学生センターの自己点検の評価と、現状と評価と資料とが混在しているので、それらを分けたほうが外部のかたには見やすいと思います。これは非常によくできていると思いますが、将来、独立行政法人化になると、独立行政法人としての留学センターの位置づけにおける全学的ないろいろな中期目標に対しての到達度、評価というものが入ってくると思います。大学の先生がたは書類を書くのに非常に時間を取っておられるので、そういうときに効率的に、こういうものをそのままスッと入れられるような仕組みを考えておいたほうがいいのではないかと考えています。

ただ、少ない人数の中で非常にたくさんの事業を展開していることには大変感心しました。また、社会貢献ということでは、金大の留学生センターに地元はある意味で頼っているというところで、留学生などもいろいろな形で市民との交流をしていることから、私は市民的な認知度も高いと思っています。しかし、全国レベルでいろいろと評価される時代になってくると、ここの留学生センターの特色として、今もそういう点では金沢という地域に根ざした一つの文化的な交流をしています。そういう部分をさらに続けていただければ、地域からの交流がしやすくなるのではないかなと思っています。

留学生センターをいろいろな意味で今後、大学としてきちんと位置づけを考えていかれたほうが良いと思うことは、資料の169ページに留学生センターの規程がありますね。その中の第4条に「センターに次の職員を置く」と書いてあって、「センター長」「教官」とあります。そして、2項で「前項各号に掲げる者のほか、必要に応じ、事務職員および技術職員を置くことができる」という書き方は、ある意味で、留学生センターの全学的な位置づけを非常に端的に表しているのではないかと思います。そして、171ページ、第18

条に「センターの事務は、学生部留学生課において処理する」とあります。先ほど私は、全学的な位置づけの中の留学生センターの担うべき位置づけと言いましたが、このとき国際交流関係図をお出しただいて、いろいろな委員会があることは分かるのですが、留学生センターと留学生課、本部事務局の関係と役割、または、センター長と教官がいるのは当たり前ですが、それを担っていく事務局職員をどうしていくかということが、私はかなり大きな問題になってくるのではないかと思います。

金沢の小中高等学校、学校教育において留学生センターといろいろな交流させていただくということで、なくてはならないという評価をしていますが、今後は留学生センターが特化した形で、金大の中でしっかりとした位置づけがされることがさらに必要となってくるのではないのでしょうか。同時に、留学生が減少してくる中で、厳しい状況も予想されると思っています。そうすると、10万人留学生構想といっていますが、これは金大だけでなく日本全体がすでに留学生の市場としてあまり魅力がなくなっているということも一つの事実なので、留学生が減少してくることに對して、大学としては、留学生の質も含めて、どういうふう to 獲得できるのか。あるいは留学生に選ばれる特色ある教育課程、さらには日本語教育でも、日本の文化でもそうですが、そういうものについてどういうプログラムを積極的に提起していくのか、こういうことが大事になってくると思います。

ただ、留学生は日本の文化や金沢の文化を学びますが、金沢大学の日本人の学生はおおよそそういう素養がないまま卒業していくということですので、やはり大学と一緒にこういうことに取り組んで、留学生と日本の学生と一緒に研究する場であればいいなと思っています。

(中山) ありがとうございます。

今までのご報告に対して、ご質問等があれば受けたいと思います。何かありますか。よろしいですか。では、各項目についての報告のときにまた受けたいと思います。

休憩

(中山) それでは、後半を始めたいと思いますので、よろしくお願いします。

今日ご出席されている外部評価委員のかたは、全員紹介をさせていただきました。お話の中にもありましたが、協定校のアメリカ、タフツ大学のチャールズ・井上先生にも外部

評価委員をお願いしていますが、残念ながら、まだ授業期間中ということで渡日することができません。井上先生には、11日に渡日していただき、12日の午後に講演会という形で報告をしていただくことになっています。事前の報告書はすでに頂いているのですが、時間のあるかたは12日にもご出席いただければと思います。

それでは、後半に入りたいと思いますが、評価の項目として7項目をお願いしました。当初の予定ではこの項目順にということで考えたのですが、少し時間が押しています。では、どういう項目で評価をしていただいたかを申し上げます。1番はセンターのあり方と目標、2番は教育活動・教育システム、3番は相談指導活動、4番は研究活動、5番は地域・社会貢献、6番は組織・管理運営、7番はその他として点検評価システム・将来ビジョン等となっています。これらの項目をすべて取り上げると、あと2時間ぐらいかかるのではないかと思いますので、外部評価委員のかたと相談をして、特にセンターにとって重要である、またここに来られている人にも重要であると思われる項目として、教育活動・教育システム、相談指導活動、地域・社会貢献、この三つをまず取り上げさせていただきたいと思います。その他の項目については、時間の許す範囲でご報告をお願いしたいと思います。

最初は、教育活動・教育システムについて報告をお願いしたいと思います。

(越前谷) それでは教育活動・教育システムに対する評価についてお話ししたいと思います。センターは今、六つのコースを運営しています。その六つの一つ一つを話すことは時間の関係もありますので、主に日本語教育の観点から取り上げてお話ししたいと思います。

大学院留学生予備コース、いわゆる日本語研修コース、あるいは6か月の研修コースと呼ばれているものがあります。これは週15コマで17週ぐらい連続する、大変集中的なプログラムです。ここにご出席のかたの中で、これに関与している先生も多かろうと思いますが、これは大変上手にシステムが作られていなければ、なかなか教育効果を上げられるものではありません。また、6か月研修コースに入ってくる学生はその後、大学院でマスターなりドクターに入り、学位を取ることを目的としています。そういう人のための、予備の6か月の日本語教育として位置づけられているものです。もちろん日本語教育だけでなく、日本事情等その他、異文化間コミュニケーション等もその中にカリキュラムとして報告されていますが、主に日本語教育で6か月が運営されている、大変集中的なコースです。この「金大キャンパスの国際化を考える」の中に報告があつて、この7年間、每期、

教育内容に対応を加えたと簡単に書かれていますが、その後ろには、先生がたの不断の努力があったことは容易に推測できます。

また、この6か月研修コースは、ほとんどのセンターで中心的な教育プログラムの一つとなっています。ところが、大変制限が多い。まず、人的な制限があります。週に15～20コマの授業を開いているのに、それに投入できる先生の数常勤、非常勤を合わせて、大変少ない数で仕事をしていかなければなりません。また、時間的な制限としては、大学院に正式に入るまでの6か月間というのは、長いと思われるかもしれませんが、実質、日本語教育が密にできるのは15～17週間の間です。さらに、それだけ集中して毎日同じものを繰り返し積み重ねていくにもかかわらず、専有の場所がない。研修コースは、大学教育開放センターでやっているということでしたけれども、このように空間的な制限もあります。そのような中でプログラムを運営していくには、どうしてもより合理的な、より効率を求めて内容を変化していかざるをえません。

なおかつ、学生の能力に非常に差があります。つまり、大学院に入る学生と、これはたしか教員研修も一緒に引き受けていらっしゃるから、モチベーションから何から全く異質の学生たちを……。お考えください、毎日3コマあるいは4コマ、月曜日から金曜日まで、一つの部屋に入れて教育をするわけです。それは本当に教師側の忍耐力一つが勝負の決め手と言ってもいいぐらいのものです。

それに当たって常勤の先生がたはシステムを作り、問題が起きたときには学生一人一人に対応し、また非常勤の先生がたにも問題が起こったときには、その悩みを、あるいはそのかたたちのいろいろなアイデアなどを聞くということもしなければなりません。しかし、問題があつて、どうなっているかということが分かっても、それに対処することは、まずできないと多分いえると思います。つまり、先ほども申し上げましたが、あまりにも制限が多いなど、荷重が負担だからです。

しかし、金沢大学は、その中でもプロジェクト専門への橋渡しということを企画、運営しています。また、後期には、ハイブリッド・ドラマプロジェクトというものがあります。これは金沢大学の6か月研修コースを特徴づける、大変いいものです。もともと金沢大学の先生は、5か月間専門入門でしたか、そういう全国的な教材をきちんとお出しになっています。わずか1か月しか日本語を勉強していない学生に、専門の発表ができるための力をつけるには、こういう順序でこういうふうにやれば、こういうふうにつくということを教材化したものをお出しになっています。そういう優れた教材を基にして、こういう企画

ができたのだと思いますが、並々ならぬ努力の結果、今、大変いい成果を上げていると拝見しました。

ただ、これから予算なり、いろいろなことが出てくるでしょう。今のままということは恐らくありえません。その中で、これだけ時間と労力を使う教育が、果たしてセンター全体のバランスの中でどれだけ認められていくのか、あるいはどれだけ正当性がきちんと評価されるのかということは、大いなる心配の一つです。これからの状況に応じて、6か月研修コースの中にいろいろな工夫を、さらに内容や時間配分にしても変更を加えて、弾力的に運用ができるような形にしていかなければならないのではないかと思います。

次に、日本語・日本文化研修コースです。日本文化を教えるコースとしては、まさに理想的に運営をされていると思いました。ニーズの多様化にこたえるためには、いろいろな試行錯誤をお続けになったと思いますが、大変成功したプログラムができていると拝見いたしました。これは、プログラムをコーディネートしている専任教官の能力が非常に高いということと、プログラムへの学外、あるいは学内からの大きな支援があつてのことと思います。いずれにしても、それをきちんとシステムとして運営していくために教官がやっていらっしゃる仕事内容というのは、敬服に値するものであると思います。

先ほどの午前中のセッションの中で、日本語教育の比重が軽いのではないかという提案を問題提起という形でさせていただきました。題の中にもありましたが、このコースはほとんど日本語で行われていきます。それから、合宿や里親制度など、いろいろな活動の中で、日本語を実際に使わざるをえない状況に学生を追い込んでいます。そうすると、実践から学んだ日本語のほうが、コースで学ぶ日本語よりも、もしかしたらコミュニケーション力がつくかもしれないということも拝察できるので、今後、もし何かできることがあれば、日本語の、特に実際のコミュニケーションの場で培われる力とは違った日本語能力、それもあり上レベルの日本語の授業ができればいいなと思いました。

最後は、もっとも注目すべき総合日本語コースです。信じられません。これは日本語教育に対する一種の挑戦ですね。というのは、日本語教育というものは原則的にニーズベースで行われています。つまり日韓プログラムの学生であれば、こういうニーズだから、それに合わせた日本語、日韓に合った日本語を教育しよう。短プロの学生であれば、こういう目的で、こういうふうに日本語を学びに来ているのだから、それに合った能力をつけてやろう。あるいは、大学院生にはこういう能力、例えばうちの場合では、工学部と農学部では要求されるものが違うので、農学部にあった日本語能力、工学部に合った日本語能力

と。つまり、ニーズに合わせてそれぞれのコースを提供することが、原則として今の大学で行われている日本語教育ではないかと思います。

それをとにかく、先ほどの6か月研修コース以外、初級以外の学生を全部ひっくるめたのです。そして、総合日本語コースとしたのですね。今のところレベルが七つあります。そこに来た初級の学生は6か月に入れるわけではないですね。そこでも初級は開いているのですね。そうすると、先ほど6か月のところでは言いませんでしたが、6か月は数がどんどん減っているはずですよ。なぜかという、この地域にもどんどん留学生センターができて、その学生を預かって6か月をやるというシステム自体がもう崩れているからです。そうすると6か月研修コースは、20名ぐらいの定員になっていると思いますが、とても定員を満たすことはできません。そこで、集中という形で初級が行われます。そして、総合日本語コースでも、これは毎日1コマずつ5回、それが初級から上級までであると。これは始まって、それほどの時間はたっていないでしょう。まだ、3年ぐらいですか。

(ルチラ) 5年です。

(越前谷) そんなにたっていましたか。すみません。本当のところ、どうなのかなと。何か、とても面白いことが起きていそうだなと(笑)。でも、本当に基本的な姿勢を全く変えた、恐らく新しい教育が何か行われているのではないかと。あるいは、そこでのトライアルでやられているいろいろな試みは、もしかしたら私たちに教えていただけるのではないかと期待を非常に抱かせます。

つまり、先ほど私が日本語教師として勉強させていただいたと言ったのは、まさしくここです。今までニーズベース以外のコースづくりをしようとは考えていませんでした。苦しい中で、日韓が来れば日韓のための日本語、短期が来れば短期のための日本語をというふうに、個別に日本語コースを設営してきました。そうすると大変お金がかかりますし、全学に負担をお願いしなければならない、頭を下げなければならない部分が非常に多くなるわけです。それを一気に、こういう形で解決なさいました。

ただ、この評価の中でも指摘をさせていただきましたが、これは、所詮は補講です。ですから多分、謝金ベースの財政的な裏づけでしかありません。そうすると、先ほどもお話がありましたように、今後、この大学という環境の変化の中で、この補講謝金というものがどれほど配分されるのか。もしかすると多くなるかもしれません。どんと一まとめに大

学に配分されるわけですから、その中の分捕り合戦で留学生センターがたくさんのものを取れる可能性もありますが、大変財政的に弱いものをベースに、全学に対しての日本語教育を提供しているわけです。だから今後、ここのところで新しい教育方法なり何なりを確立していくために、それから私ども、後につく者にお教えいただくためにも、ぜひ財政的な裏打ちをもう少ししっかりお取りになって、こういうふうにやればこういうことができるよということの先鞭をつけていただければ、私どもとしては大変ありがたいと思います。

このほかの教育活動として、日韓共同理工系学部学生、あるいは短期留学プログラム、教養科目としての日本事情などがありますが、とにかくこの8年の間、極めて高い水準の教育を維持なさっていますし、実践されてきたことは、この資料の中からもうかがえます。さまざまな困難を抱えながら、留学生のいろいろな能力を向上させるための教育活動を展開なさってきたことに心から敬意を表します。本当に全国の留学生センターと比較しても、極めて高い教育水準のセンターであることは間違いないと思っています。

(尾崎) 越前谷先生が今おっしゃったことに私も全く同感です。ただ、外部評価という立場で、二つだけ取り上げてお話をしたいと思います。

まず、日本語教育の総合日本語コースというものですが、そもそも総合日本語コースが生まれたきっかけは、短期プログラムが始まって、日本語教育をやらなければならないと。ところが、短期の学生だけの日本語プログラムを作るにはリソースが足りない。人の面でも、予算の面でも足りないということで、総合日本語コースというものは、ある意味、教育理念に基づいてスタートしたのではなく、対症療法的に選ばざるをえなかったことではなかろうかと思います。

多くの大学では、大学院等で勉強をしている学生のための、いわゆる補講という形で日本語授業を設定していて、そこではいろいろな背景を持った、いろいろな専門の学生が集まって、一般的な日本語の授業を受けているということが実態としてあるわけです。私たちのところもまさにそうです。名古屋大学の場合、短期交換留学をスタートさせた96年の段階では、やはりこの学生たちに単位を認定する、それだけのカリキュラムをきちんとしなければまずいということで、独自のコースを作りました。そのために日本語プログラムの予算がついたわけではなくて、結局、6か月の予備教育の予算等をやりくりするという形で、一方を削って一方を作るという対応をとったわけです。同じように日韓のプログラムについても、日韓の学生だけを対象としたものを作り、これは工学部等全学的なバック

アップを得て、別コースという形でやってきています。

ですから、留学生の留学目的や特性に応じて、グループごとに日本語教育を設計して、細かに対応するという伝統的なやり方と、もう一方では、いろいろな背景の学生を対象にする一般的なコースがあったわけです。ところが今後、予算等が厳しくなることはもう目に見えています。どこの大学でもこれ以上、学生のニーズが多様化していくことに対応しきれないから、金沢大学のような総合日本語コースを作らざるを得ないだろうという議論が、ここ数年の間に広がってきていると思います。そういう意味で、金沢大学の総合日本語コースがどうなっていくのかということに非常に関心を持って見えています。

このコースをどう評価したらいいかということですが、今回の報告書を見る限り、いろいろと工夫をなさっています。例えばC1という、初級と中級の間のようなレベルを設定しなければうまくいかない、実際に教育をしたところから問題を発見して、新たにレベルを作ると。ところが、教材が無いのです。市販の教材で対応できるものがありません。名古屋大学も全く同じ問題を抱えています。金沢の場合はC1というレベルで教材開発をしています。こういうところは非常に評価できると思います。

ただ同時に、どれだけの教育成果が上がったかということで我々は評価をされます。ですから、教育の成果をどういう形で測って報告をするか。それから、誰に対してという問題があると思います。一つは、我々はテストをやって成績管理をしています。この成績管理の面で、金沢大学は非常にシステムが整っており、学生の成績をきちんと出しているという面では素晴らしいと思います。例えば、6か月の予備教育で日本語能力試験3級を受験させて何人通ったとか、A、B、Cのグレードで出しているなど、こういうやり方を今後もお続けになると非常に説得力がある。これだけの成果が上がっていると、ある程度言えると思います。それから、古城先生がおっしゃった、留学生の行き先のところで先生がたがどう評価するか、これも大事なところだと思います。何年も続けてくると、多分、学内的にはそろそろ評価が決まっているのではないのでしょうか。恐らく、良くやっているという評価を得ていらっしゃると思いますが、時には外部評価、センター外の先生がたの日本語プログラムに対する評価も必要になると思います。

総合日本語コースに戻ると、成績はA、B、C、Dとなっていて、何人合格してどうだという数字が出ています。その数字についてどう評価するか、これでいいのかどうかということを書かなければ、自己評価にもならないし、外部評価もできないというのが実感です。

今朝、いろいろな追加の資料を頂きました。報告書を読んで分からなかったところを中間報告に書いておいたら、私が知りたかった情報は全部頂きました。今朝、頂いた情報の意味合いは、私にはまだ読み取れないのですが、例えば短期留学生の日本語の成績の結果がきちんと数字で出ています。これまで246名のかたが短期交換留学生で日本語のコースを取って、優が93、良が72、可が43、不合格または放棄が38となっています。この数字をどのように考えていくかということは、先生がたが評価なさることだろうと思います。ただ、ABCのばらつきを見たときに、短期の留学生にとってCやBという成績は決してハッピーなものではないのではないかと、本当はAをもらって当たり前ぐらいの気持ちで来ているのではないかとということもちょっと考えてしまうのです。そうすると、短期で来た学生が総合日本語コースの七つのレベル、あるいは七つ全部とはいわないまでも、五つなどにばらばらに出ていったときに、そのすべての学生の日本語の習得状況をどのようにモニターし、個人的にケアしていけるのかなどと、やはり総合日本語コースを運営するうえでの苦労はすごくあると思います。ある部分はうまくいっていて、ある部分は課題であるところを教えていただけると良かった。とても大事なお仕事をしてくださっているので、ぜひもう少しクリアな評価が頂ければありがたいと思います。

それから、予備教育の学生数が減ってきてどうなるかという問題は、将来構想に関わってきます。名古屋大学もどうするかは頭が痛いのですが、選択肢の一つとしては、非常に密度の濃い、非常に効率よく成果が上げられる日本語教育は、グローバルに見たときに売れるのではないかと。これまでは文部科学省の縛りの中で、文科省が送ってくる学生を受け入れて、後は若干学内の学生を拾うような形で何とか定員を埋めなければいけないということでしたが、そうではなしに、もう少し戦略的に生かす道はないかなということを考えたい。金沢大学も十分な実績がありますから、むしろそういう教育成果をアピールなさって、それを一つの売りにするような可能性はないのかと。富山や石川、新潟でも、北陸地域で、もしかすると短期決戦で、非常に効率のいい教育をしている機関に留学生を集めることも有り得るわけです。言い換えると、大学によっては、国費研究留学生の6か月は自分のところではペイしないからどこかにお願いしようというときに、民間の日本語教育機関にお願いするか、それとも大学で、専門の先生がいるところをお願いをするかということとは多分、大学を越えて起きる可能性が十分あると思います。その辺りのことも含めて、研修コースの将来を検討してみてもいいかなと思いました。

(細川) 私からは、教育活動関係と地域の問題も含めてコメントをさせていただきたいと思います。初めに紹介がありましたが、私も 86～90 年までの 5 年間、金沢大学の当時の教養部にいました。今の留学生センターの前身の、学内措置としての留学生教育センターのさらに前身の、学生部日本語講座の設立に関わった記憶があります。そのときは、まさに総合日本語コースのようなものが発端になっていました。つまり、当時の教養部が教養部としての日本語・日本事情という講座を始めたのですが、そこに全学の大学院生から受講したいという希望があったのです。ところが、当時は非常に強力な教養部だったので、それを突っぱねて、「教養部以外のことはやらない」という経緯があったわけです。それで、どうするかということを学生部長が中心になって考えて、学生部に日本語講座という全学的な組織を置かざるを得なくなり、私が日本語教育が専門だということで、そのコーディネーターを引き受け、そこからだんだんと留学生センター構想が生まれたという経緯があります。そこで行われていたことは、ある意味では、話題に出た総合日本語コースとほとんど同じようなものだろうと思います。

今、ちょうどそのことが話題になっています。これが今回の外部評価と連動するかどうか分かりませんが、私には、留学生のための日本語教育が常に専門教育への橋渡しであっていいのかという思いがずっとありました。つまり、一種の教養教育、言語教育として、自立していかなければならないのではないかという思いがあるわけです。もちろん専門教育を無視するというわけではありませんが、ある目標があって、その目標に役立たせるために日本語教育をするという発想に立っていると、日本語教育はいつまでも下請け機関でなければいけません。学部の入試等をはじめ当事者能力を持っていないという宿命を日本語教育自体が持っているわけですが、そこをどうやって越えるかということを、日本語教育の人が考えなければいけないと最近思っています。ですから、先ほど学習者ニーズ論が出ましたが、私は現在、むしろ反ニーズ論者といった方がいいかもしれません。つまり、ニーズがあるから日本語教育をやるという立場に立っていると、日本語教育自体の非自立性をいつまでも越えられないということです。もちろん、何のためにやるのか。確かにそういう要求があったらコースは作らなければいけない。ある程度、制度的なシステムとしての要求には応えなければいけません、それはそれとして行いつつ、結局、言語教育は何のためかというところを考えていかなければならないと思います。そういう意味では、この総合日本語コースというものをどういうふうに位置づけていくかということは、留学生センターとしての自立性にかかっているし、非常に大きくいえば、教育スタッフ一人一

人の言語観なり言語教育観というものに支えられていくのではないかなと思います。

そこで、私なりに方向性として、地域との連携を考えることができると思っています。というのは、やはり日本語母語話者と非母語話者との連携というか、単に教える、教えられる関係ではなく、ともに学ぶという関係を作っていくためには、やはり大学の中でも、大学の外との関係もそうですし、日本語学習者が日本語を通していろいろなことを発信していける力をつける。金沢の場合は、そういうことができる可能性の土壌が十分にあると考えます。

しかも、金沢では、このことを一つの日本語教育として位置づけようとする試みが具体的な活動として、すでになされていることが午前中のヒアリングのときに紹介されました。それをぜひ、形にして発信していただく。金沢にはこういう教育実践があるということをもっと世界に開くといいでしょうか、全国に開いていただくことによって、日本語教育そのものの位置づけを考え直していく、問い直していくようなきっかけに十分になりうる、そういう意味で私は評価をしています。ただ、それが現在のところ、まだ明確な形で現れていません。潜在的な形ではあるようですが、明確な形で現れていないので、ぜひ形にしていきたいと思っています。

(中山) ありがとうございます。以上のご報告について、ご質問はありますか。後からでも、何かありましたらお願いしたいと思います。

それでは次の項目として、相談指導活動という項目について、ご報告を頂きたいと思います。

(古城) 朝9時から頑張っていますと、そろそろ疲れてきます。皆さんもお疲れのようですので、話を簡潔にさせて戴きます。

金沢大学留学生センターの相談指導部門が全国でもトップクラスの活動実績を上げていることは、午前中から午後のヒアリング等ですでに確認ができていますので、そのことについては詳しく繰り返さないことにします。ポイントとして、やはり少し広い意味での相談支援活動というものには、ある意味では自然な形で外国人と共生できる社会、文化、そういう仕組みを広めていくということが基本になればいけないのですが、そのことを明確にしているという意味で評価をしているということを申し上げたいと思います。地域社会との連携や、日本人学生との種々の交流活動、あるいはK I S Sの活動支援についても、

そのことが大事なわけです。金沢大学の学生、院生、あるいは金沢大学を取り巻く地域の皆さんが、留学生あるいは外国人研究者をリソースとした相談支援を中心とする活動によってそういうチャンスを得ていると評価すれば、少し広い意味で、こういう活動が重要であるとさらに認識がされると思っています。

一方で、学内においては、追加資料で頂いた相談件数の多さもさることながら、留学生からよくある相談の一つは、学習や進路問題だと。私も工学部・工学研究科にいたことがあるのでよく分かりますが、やはり自分の指導教官には言えない悩みが、どこで、どういう形で、ある意味では解決されたり、方向づけされたりしているかということ、このデータはよく示していると思います。留学生が、行き詰らないときは何の問題もなくその研究活動を進めていると思いますが、少しつまづきそうとか、見通しが暗くなったときに、やはり自分の指導教官にはなかなか言えない面があるということ、このデータは示していると、金沢大学の関係者は認識していると思います。また、そのことは、ある意味で相談指導部門が機能しているともいえると思います。もちろん経済問題、住宅問題など通常の問題もありますが、この件数の多さが、決して飛び抜けて多いわけではないですが、機能していることを表していると思います。

また一方で驚くべきは、日本人からの相談の内容です。しかも日本人の教官からの相談もおおよそ300件中60~70の件数があるということは、逆に、各部局の先生がた、留学生に関わるいろいろな教育関係の人が、留学生との問題で相談部門と連携していることを表しています。このことも、実はけっこう全国レベルよりも高いように思えて、ある意味では、留学生センターがかなり信頼されていることを実証していると思います。さらに、事務官からの相談もけっこう多いようですし、もちろん日本人学生からの相談も多いということで、このデータは、何を強調して、何をどう読むかということを示唆していく流れもぜひ作っていく必要があるわけですが、地域社会、あるいは金沢大学の中で教官に対して、留学生に対して、日本人学生に対して、それぞれ、この部門が十分に機能していることを表していると思います。

あと更に感激したことは、留学生課等の配慮もあって、大学会館にLANの端末を引いたうえで海外留学フェアといったものが非常に活発になされてきつつあります。これは、日本人が海外へ雄飛して行く流れにすぐにはつながりませんが、きっとこのチャンスを利用して、そういうものかということが分かったうえで、検討をしはじめる学生、院生が大変多いことだろうと大変うらやましく思います。

各大学ともいろいろなオリエンテーションをやっていますし、学んでいる留学生をリソースとした大学紹介、あるいは留学から帰ってきた日本人を活用した講演会、スピーチ、ブースを設けた活動はしていますが、先ほどの岡沢先生のパワーポイントによる説明などを見ていますと、目に見えて活発に、この海外留学フェアがなされていることも、十分、金沢大学の学内の人に知ってもらわなければいけません。また、そのことでもって、本当の意味での国際的に通用する人材に学生がなっていくということを認識しなければいけません。私も含めてですが、すでに大学の教授ないしは助教授になっている人は、ほとんどが外国へ行って生活をしたり、勉強をした経験を持っています。そのことで自分の人生が大きく変わって、自分の考え方も生き方も変わって、積極性もついて、そして今日があるということを十分に知っています。だから、なおさらそのチャンスをたくさん作ってやる。そして、金沢大学へ行けばそういうチャンスがたくさんある、そういう大学になっていかなければならないことははっきりしています。そういう意味で、海外留学フェア等にかかる企画は、私たちにとって見ればとてもうらやましくもあり、また、どうか大きな成果を上げていってほしいと願う結果になっています。

今までの話で私の評価結果は伝わっていると思います。どうぞよろしくお願いします。

(中山) ほかの先生から、特にありませんか。

(尾崎) 三点あります。最初に、「指導教官懇談会」と報告書の中にあるのですが、現在どういう状態で運営されているかがよく見えません。指導教官の先生がたはお忙しいし、全員が一同にということは恐らく無理なので、年に何回か懇談会を開いて、お時間のある先生に来てもらう。これは、留学生を引き受けた教官が年に1回は義務的に出るという形にしなければ、出ない方は一生出ないかもしれません。指導教官懇談会を何らかの形で制度化することが必要です。それから、「フロントライン・ミーティング」も(仮称)となっていますが、できれば仮称が取れて、もう少し組織図に位置づけられるといいと思います。

「留学生相談指導専門委員会」、これも今どういう状況であるかということは報告書からは読み取れませんので、全体として、どういうふうにシステムとして動かすかという視点がやはり大事だと思います。

それから、先ほど畑副学長がおっしゃっていた、送り出しの課題ですが、まず、どれだけの金大生が海外に出ているかという現状をどこまで把握なさっているか。実は、資料の

中に数字が出ていて、今朝ほども数字を頂きましたが、大学が把握していなくても私費で出ていったりと、いろいろなケースがあると思います。まず、その辺りの情報をきちんと把握することが必要です。帰ってきた学生が、「留学は非常にいいよ」と、ある種、他の学生に影響を与えているという報告を受けましたが、それももっと意図的に、そういう学生に協力をしてもらおう仕組みがあるともう少し日本人の学生が出て行きやすくなると感じました。

(越前谷) 学生を海外へ送り出すときにいちばんの障害になることは、恐らく各学部のシステムではないでしょうか。例えば、短期で語学学習に出たい。相手校は、アメリカであれば5月に終わって6月から始まる。6月、7月、8月と3か月あるという場合に、恐らく金沢大学は7月の何日ぐらいまで授業をやっている。その間、どうするかということは、各学部がきちんと対応しなくてははいけません。あるいはUMAP、あの組織のやり方がいい悪いの議論はさておきまして、やはりグローバルな視点で単位をきちんと評価していこうという動きであることには間違いのないわけですから、それを取り入れるにしても、あるいは何か改善策をするにしても、全学的に組織としてやらなければならないことはやっていかないと、いくら留学生センターが短期の語学留学のバックアップ、あるいは相談に応じたとしても、実際に単位に関わる部分、あるいは授業料に関わる部分がきちんと整備されていなければ、なかなか学生は出たくても出られませんので、そのところは全学で問題解決に取り組んでいただきたいと思います。

(中山) ありがとうございます。ほかは、よろしいでしょうか。

この指導支援に対するご報告につきましてご質問等がありましたら、後ほどお願いします。

それでは、5番めの項目の地域・社会貢献ということで、ご報告を頂きたいと思います。石原先生、お願いします。

(石原) ここに書いてあるとおりです。地域・社会貢献については、多様な取り組みをしておられまして、その点は高く評価されるのではないかと考えています。ただ、この自己評価表では、127 ページから時系列的に並んでいます。例えば留学センターとして、地域・社会貢献のカテゴリーで、例えば先生がある領域に参画するとか研究するなどと、

もっと書いたほうが分かりやすいと思います。ただ、実際ここに書いてあります、留学生シンポジウムの報告や研修コースの文集、金沢学への招待報告書等、この内容そのものについては、私は大変いい成果を収めていると思っています。できればこういうものに、大学の図書館や関係機関などだけではなく、広く市民のかたも参画し、こういう報告書が読めるような工夫をしていただけると、さらにいいのではないかとと思っています。

それから、128 ページのところにありますが、子供たちの国際交流の一環として留学生たちが学校へ来てくださるということで、平成10年度、各学校がいろいろと留学生センターにお話をし、また、ばらばらに行ったために、いろいろとご迷惑をおかけしたようで、窓口を決めようということになりました。私どもはそのことを非常に大事に考えておりましたが、ここに「次年度から金沢市教育委員会での取り組みがなされず」と書いてあり、これは私自身もどういう意味がよく分からないのですが、学校のほうもカリキュラムがあって、この日が良くて向こうはだめということもありますので、そういう調整機能があるといいと思います。これはかなり難しい条件がいろいろとあって、文科省か何かのプログラムを実施したいということで、難しいなと思ったことも事実です。なかなか学校のカリキュラムの中に入れることができないということもあったかと思いますが、留学生が学校の子供たちと触れ合うことは、留学生センターとしてはどういう位置づけ、どういう考えを持っているかということが明確になれば、もう少しやりやすい部分が出てくると思っています。これは「平成10年度限り」と書いてありますが、個別にはいろいろな形でやっていると思います。

私は留学生センターの、特にここにおられる留学生が地域や社会に出て行く部分と、留学生センターのスタッフが専任教官となって、いわゆる社会貢献という形でこのリソースを地域に貢献していく部分、それから、いろいろな企画の中に市民を参画させていく部分、こういったことが、より体系的にされていくと、留学生センターの存在が地域に分かりやすくなるのではないかとと思っています。この中の幾つかに私自身も参加させていただきましたが、留学生の人たちが非常に生き生きしているということと、お世話して下さる先生がたや事務のかたたちが非常に熱心だなということを思いました。地域・社会貢献というものは、志があつて頑張る気がなければ、なかなかできない分野でもあります。ただ、私は、留学生のかたたちが持っている、ある意味での活気のよさが金沢大学の学生の中に入っていくことが、留学生センターの最大の社会貢献ではないかと思っています。そういうリソースを、ぜひ金沢大学の学生たちに影響を及ぼしていただくことで、大学全体で地域貢

献ができるという部分も、これからぜひお願いしたいと思っています。

(中山) ありがとうございます。128 ページのところに、括弧「なお次年度から金沢市教育委員会での取り組みがなされず、平成 10 年度限り」とありますが、この意味の説明をどなたかお願いします。

(八重澤) 私が当時、この橋渡しの係を担当していました。簡単にいうと、順不同で各学校から留学生センターに依頼が来ていたわけです。そうすると、センター及び留学生課は今非常に忙しい、また、ばらばらに来ていたので、なかなか、それがさばききれないということがありましたので、例えば、前期は何月何日までと決めまして、当時は留学生教育企画係の係長と私の二人でやっていました。そういうふうには、こちらのほうからお願いをしたときには、おそらくそちらの担当のかたは教育委員会のかたでしたので、そのほかの業務をたくさんやっていらしたため、締め切りが間に合わなかったということで、あとは個別対応になったと思います。だから、組織としてのやり取りがなされなくなったということが現状です。決して何かして途絶えたということではなくて、手続きを決めたがために、そこに壁ができてしまったと私どもは認識しています。

(中山) ありがとうございます。ほかの委員のかたから、地域貢献について報告はございますか。では、地域貢献についてのご質問はありますか。

課長さんのほうからちょっと補足があります。

(五十嵐) 先ほどの件をもう少し補足させていただきます。国際理解教育への留学生の派遣事業につきましては、その後も引き続きやらせていただいています。一度、県教育委員会、市の校長会等にも、こちらからお邪魔をしまして、こういうことを考えていますのでぜひという話をさせていただきました。その後、県の国際交流協会と相談しまして、向こうに全面的な窓口をやっていただいて、小学校、中学校、高等学校で金沢大学を希望する学校があれば、こちらに連絡を頂くということで、今もそれは継続をさせていただいています。

(ルチラ) 日本語・日本文化研修コースのカリキュラムの一環として、毎年、中学校、

高校を訪問しています。そのときには教育委員会に全面的なご協力を頂いて、大変感謝しています。石原先生ご自身もお忙しい中、毎年、学生にいろいろなことを講義して下さいます。また、そのときには毎回のよう、高校の先生との話し合いや、子供たちとの話し合いということで、学ぶ姿勢や教える姿勢について、いろいろと意見交換をしています。私自身はすごく有意義な意見交換が行われていると思っています。

(中山) ありがとうございます。ほかにありますか。

5時を少し過ぎていますが、先ほどの7項目のうち、3項目についてご報告を頂きました。その他の項目について、ご報告いただくことがあればお願いしたいと思います。ございますか。外部評価委員の皆様、よろしいでしょうか。

報告はこれで終わりますが、せっかくですので、指導的な役割を果たして活躍をされている委員の方々から、必ずしも評価ということではありませんが、今後の金沢大学の留学生交流について、こういうことを期待したいということを簡単に一言ずつ頂いて、この報告会を終わりたいと思います。

(畑) ありがとうございます。先生がたから頂いたご指摘に関して、3点ほど私から、「今後こうやっていきます。」というふうに、自信を持つては言えませんが、「努めさせていただく。」ということで、申し上げたいと思います。

第1点は、留学生センターの独立した建物がない、非常勤講師の部屋が狭くて乱雑だというご指摘です。これは古城先生をはじめ、いろいろな先生がたからも頂いています。本学は総合移転の1期移転が終わって、2期移転があと2年ほどで終わります。留学生センターの建物に関して概算要求は出すのですが、この移転絡みで、留学生センターの独立した建物はなかなか難しいわけでございます。文部科学省は既存施設の有効利用という考え方でして、本学でも各学部等の共用スペースの20%を出せということであります。その作業もしておりますが、何しろ各学部等の建物から何パーセント出して、これを留学生センターのためにということにするということになりますと、どこの大学でも似たり寄ったりだと思いますが、これはなかなか話が簡単ではないということです。

今、大学としては2期移転が終わると、旧教養部の建物、総合教育棟といっていますが、その自然系の先生がたが新しいところへ移ります。そうすると、そこにスペースがかなりできますので、そこをねらっています(笑)。ただ、教養教育のための演習室をたくさん

造るのだという考え方もありますので、そこと話し合いをして、できるだけ留学生センターのための共同研究室、もしくは非常勤講師の先生がたが集まれるスペースを作りたいと思っています。

実は、すでに先生がたからお話がありましたが、留学生センターができたとき、センターの先生がたは、いろいろな学部等の建物に分散していました。それを少し動かしてもらって、今の総合教育棟のほうに大半の先生がたの研究室を確保していただきました。それから、非常勤講師の先生がたの部屋も造れということで動いたのです。旧教養部の人文社会の共同研究室というものがあまして、これはかなり広いのですが、そこを人文社会の先生がたと留学生センターの先生がたの共用スペースにしようということで話がついたのです。ところが、実際に使ってみると、留学生センターの先生がたがワッと使うものですから、ひさしを貸したつもりでいたら母屋を取られるということになってしまいました(笑)。これはいけないということで、教養教育の研究調査部の部屋を、今の部屋ですが、何とか一つ出してくれないかということで、そこへ移ってもらった次第です。このように苦勞をしてはいるのですが、総合移転が落ち着きましたら、そういう形で総合教育棟のほうへと思っています。

第2点は、石原先生から頂きました留学生センター規程の話です。これは先生のご指摘のとおりでおかしいです。「センターに次の職員を置く。(1)センター長、(2)教官、(3)前項各号に掲げる者のほか、必要に応じ、事務職員および技術職員を置くことができる」。この規程はおかしいです。「(3)事務職員(4)その他必要に応じて技術職員を置くことができる」と規程改正をすぐにやりたいと思います。ただ、今、学生部のもとに留学生課があつて、留学生センターの事務は留学生課が担当しているわけですが、法人化に向けて全学の組織の見直しをやっています。現在、学術交流と留学生交流を国際交流課と留学生課が別個に担当しているのですが、これを一緒にして情報国際部として、学生部から離れることになります。そのときに規程を新たに作るようになりますので、そこで規程改正をやりたいと思います。

それから、第3点は、日本人学生の海外留学ですが、これはご指摘にありましたように、学部の協力がなければどうしようもありません。留学生センターだけが頑張っても話にならないので、留学生センターのほうから、各学部に本格的に留学生を海外に派遣するようなシステムを考えるように要請すべきであります。よくうちの学長が話に出すのは、ある大学の事例です。そこでは多くの学生を海外の大学へ出しています。向こうで取ってきた

単位はこちらでもそのまま認定するというシステムです。そういうことも参考にして、学部等に対し働きかけて、学部等が積極的にそういうシステムを考えるようにもっていきたいと思います。

(中山) ありがとうございました。

それでは、先ほどお話ししましたように、金沢大学における留学生教育支援、その他、地域貢献等を含めまして、期待することについて一言ずつお言葉を頂きたいと思います。

(細川) 私は5年ほど金沢にいた経緯もありますし、いろいろなかたとの交流もありまして、それなりの愛着を金沢大学に持っています。そういう意味で、この留学生センター、特に留学生教育の柱としての留学生センターには、一つのポリシーを持った自立性を期待したいと思います。それは、当然、日本語教育の自立性でもあるし、同時に全学に対する留学生センターの発言力というか、留学生センターからの発信を全学がまじめに受け止めてもらえるような力といいましょうか、そういうものを期待したいと思います。

(古城) 非常勤講師の方が利用されている部屋の状態について随分取り上げていただいて(笑)、大変申し訳ないと思っています。少しオーバーめに申し上げましたが、とても足の踏み入れようがないという意味ではありません。要するに、明らかに狭いです。それから、足りません。つまり狭隘さが明らかに分かるような状態だという意味で申し上げているのであって、講師の先生や常勤のご担当の先生の整理整頓の能力を言っているわけではありません(笑)。どうぞ誤解のないように、よろしくお願いします。

細川先生と同じように、一言と申しても三言ぐらいになりますが、やはり法人化後の動きに直接参画していく部局として、堂々としてほしいと願っています。今の副学長先生の真摯なお答えを聞いて、そういうことをさらにもお願いすることは恐縮ですが、ある意味では、どうしても大学など戦略的な発言をするときには、各研究科長も含めて国際化というのは言葉としては、どんどん出てきます。でも、それを具体的にどうするかという方策は、けっこう自分のところの動きではなく、留学生センターで何とかしてくれという形ですぐに振られるわけです。そういうものに対して、「それはそちらの仕事でしょう。」ときちんと言っていけるような仕組みが、もうできていると思いますが、さらにそれをきっちりとしていくためにどうしていくかということで、ある意味では、学内できちんと認知さ

れた組織となるにはどうしたらいいかということが課題になると思います。

教育、研究、社会貢献という三つの評価要素のうちの教育については、あまりにもたくさん熱心にやっておられる。教育にしろ、相談業務にしろ、それを見るにつけても、本当に大丈夫ですかと言いたくなるぐらいにたくさん熱心にやっておられます。そういう意味で少し申し上げましたが、やはり教育はして当たり前という、大学教官が持つ一つのしなければならぬ職務として教育の問題を、幾ら自分たちは熱心にやっているといっても、これはなかなか認知はされないと思います。そういう意味で、研究や社会貢献も含めた、総合的な力をはっきり出していくことが大事になります。特に、研究について、学部、研究科でもけっこう業績のない人もたくさんいますが、一方で、これだけ忙しい部局の人に同等の研究能力、あるいは研究成果を求める風潮もあります。ですから、留学生センターの先生が各部局の教官として迎えらるることについては、なかなか難しい面があります。そういうことを払拭していくためにはどうしたらいいか、これははっきりしていると思います。要するに査読論文を作っていくしかほかはありません。そういう流れで、教育はして当たり前、研究をさらに付加的に、厳しい状況の中でこれだけ研究成果を上げて、どんどん具体的な成果を発表しているという力を示すことでしか、大学の中で力を持つていくことはできないと私は思います。

一方、社会貢献としては、もちろん地域の問題、留学生、大学の研究者をリソースとした活動は、留学生センターがかなりリーダーシップを取れる部分ですから、そのことはいつてみれば優位に立っているわけです。その点を強調していてもいいと思います。私が思うに、そういうことを通じた形で、ぜひ学内でさらに、もうすでに力があるわけですから、それを早く認めてもらえるような流れを作っていってほしいと思います。

最後に、FDのことについても少しお願いしておきたいと思います。私どもがやっている試みで、もしも適切であればという意味ですが、英語での授業がこれから各研究科、留学生センターの中でたくさん行われていって、どういう英語の授業のしかたが適切で有効な教育効果を上げるかということを各部局の先生や研究科の先生は知りません。全くその点については無知です。だから、ほとんどの短期留学のプログラムで、恐らく私が想像するに、各部局から出てくる科目のほとんどがオムニバス方式、次から次と先生が替わって、学生にとってみれば全く学習意欲がわからない授業か、あるいは下を向いて原稿を読んでいるだけの授業になります。そういう中で、どのように授業をすることがグローバルな社会の中での英語の授業なのかということを示していけるのは、これもまた留学生センターの

先生がただけだと思っています。そういう意味で、日本語の授業をどうしていくかというFDももちろん大事ですが、英語に特化した形でのFD、プログラムの開発、あるいは学内の啓蒙にも、ぜひ力を入れていって欲しいと思っています。

1歳違いは、ほとんど同級生と同じですので、今後とも頑張っていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

(尾崎) 日本語教育に関してですが、報告書の中に大学らしい日本語教育、大学でなければできないような教育というところが何か所かありました。恐らくこれは外部委託ということが伏線としてあったのかもしれませんが。少なくとも民間が行う日本語教育とは違ったものを追求していかなければ、というお気持ちがうかがえました。同じことを我々も考えていて、どうしたらいいかなと考えているところですので、ぜひこの点についても、いろいろと情報交換をしながらやっていけたらいいと思っています。

そのことと関連して、日本語を教えることだけではなく、日本人学生に対する日本語教育に関する教育や、あるいはそれぞれの専門を生かした形での教育も、一方で考えられると思います。すでに教育学部のほうで、2～3人の先生は授業を持っていっぱやいますが、もう少しそういった領域で仕事ができると、さらに負担は増えるのですが、日本語教育の専門家、プロフェッショナルということの意味を追求する場がもう一つ持てると思います。やはり大学にいるということは、民間のかたに比べれば、施設の面でも、研究の面でも、かなり恵まれた状況にあります。ただ単に目の前の留学生のため、ただ単に金沢大学のためということではなくて、一個のプロフェッショナルな人間としてどうあるべきかということを常に意識していきたいと、私自身はと思っています。

それから、最初に申し上げましたが、これだけエネルギーを使ってなされた外部評価ですから、ぜひこれを生かす方策を今からお考えになってほしいと思います。

最後に、やはりチームワークが非常に大事なということを、自分自身、仕事の中で感じます。自己評価報告書を作ったことがすでにチームワークの成果であると思いますが、これから特にいろいろと厳しいときにお互いの状況が分かって、助け合えるようなセンターにしていかなければいけないと思っているので、その気持ちをお伝えしました。

この報告書の中には、そうかと思うことがいろいろとありました。私自身、今回こういう役目を引き受けて良かったと思っています。ありがとうございました。

(越前谷) 前に大きなお三人がみんな言ってしまったので、もう私の言うことはありませんということで締められるのですが(笑)。留学生センターは教育をしていればいいという誤解が、もしかしたら、あるのかもしれませんが。でも、それはなぜ大学に留学生センターがあり、日本語教育があるのかということの意義、あるいは目的がきちんと理解されていないための誤解だと思います。その意味では、研究が大切です。ただし、「留学生センターで論文がやけに多い奴は普段の仕事をしていない奴だ」とよくいわれます。研究と教育のバランスを取るということは大変難しいことです。各委員が午前中にも指摘しましたが、査読論文が少し足りないということの言い訳もよく分かりますし、現実もよく分かります。でも、それを乗り越えて、これだけ教育的に充実したものを提供しているのであれば、それに伴う研究の充実も次に考えていいのではないのでしょうか。

その際に、午前中にも申し上げましたが、お一人お一人の分担がクリアで、何の仕事をしているのかということが大変分かりやすくなっています。ただ、その後ろで、きちんとした共同作業があるのかなと。もちろん、あるかたがメインで、それをサブとして助けるということがあったとしても、同じ立場から一つのものを見つめる努力があるのかなと、そこが多少気になっているところです。今後、そのところをお考えください。

そして、私たち日本語教育に特化しますと、例えば工学部、農学部では研究があって、それを教育することが流れです。まず、先生がたの研究がある。でも、日本語教育は、まず教育があります。現場があるのです。そして、その中に必ずや研究のシーズがあります。そういう意味で、日本語教育では、やはり日本語教育方法論というところが、恐らく今、私たちがみんなで目指している日本語教育学の確立につながるはずだということで、ぜひ金沢大学留学生センターの中での共同研究、また、それを越えて全国の留学生センターとの共同研究ということで、限界、あるいは限りのある中で、もう少し私たち自身も前に進んで、自分たちのレベルを一緒に向上させていただければ、どんなにありがたいかなと思います。ありがとうございました。

(石原) この地域から見ますと、金大はもとより、留学生センターがあることは、いろいろな国の若い世代のかたがこの地域で生活をし、勉強をしているということで、やはり一つのシンボリックな存在であると思っています。そういう意味では、留学生センターは、ほかの学部と違って、極めて現場的な、実践的な教育機関だと思っています。そして、そ

ういう部分をきちんと価値あるものとして評価する仕組みも大事であると思っています。ぜひ、この石川県で教育を受けた留学生が、いわゆる反日感情を持って帰ることのないように、ここで勉強をしたことで絆が深まるようなことも含めて、留学生センターがもっとも身近に留学生を支援し、サポートしていく、一つの大きな地域全体の拠点として活躍してくださることを期待しています。

ただ、全体を見ると、留学生の支援という言葉が少ないです。やはり大人の部分ですから、生活の相談部分も非常に大事だと思います。異文化ですし、若い世代のかたですし、そういう意味では親身になって、ここに行けばそういう専門のかたのカウンセリングや、いろいろな支援を得られるということで、留学生にとっても、拠りどころになってくれる部分はとても大事だと思います。留学生センターには360人ぐらいおられると聞いていますが、もっともっと日本海側の拠点となって、多くの国の留学生がこの地で学ぶ、そういう受け入れ態勢の充実とともに、留学生センターが充実してくださることが、とても大事だと思います。

(中山) ありがとうございます。今日は長時間にわたり、本当に貴重なご報告を頂きました。この後、今日のヒアリング報告会を踏まえまして、外部評価に関する最終報告を出していただくことになっています。我々としては、今日の報告会、最終の報告書等を参考にして、留学生センターの活動、あるいは金沢大学全体の留学生交流、留学生教育、その他を大いに発展させていかなければいけないという思いを新たにしました。

また、外部評価の先生がたには遠方から来ていただきました。石原先生には非常に公務でお忙しい中、朝と昼の2回に分けて来ていただきました。本当に遅くまで、金沢大学留学生交流評価のためにお骨折り頂きました。これから、まだ最終報告を書いていただくという作業が残っていますが、多量の資料を読んでもいただきまして、非常に時間をかけてこの仕事をおやりになっていただいていますので、ここで我々として、拍手で感謝の意を表したいと思います(拍手)。

(司会) 長い時間ありがとうございました。これをもちまして、金沢大学留学生センター外部評価全体報告会を終わります。どうもありがとうございました(拍手)。

金沢大学留学生センター外部評価全体報告会
(平成15年12月12日開催)

タフツ大学チャールズ・井上教授講演会

日時 平成 15 年 12 月 12 日（金） 13：30～15：00

場所 事務局大会議室（6 階）

（三浦） 皆様、本日は多数ご来席をたまりまして、ありがとうございます。それでは特別講演会「協定校から見た留学生教育・交流のあり方」という題で始めたいと思います。

畑副学長にごあいさつをお願いします。

（畑） 畑でございます。本日はタフツ大学のチャールズ・井上先生をお迎えして講演会ということになりました。たくさんお集まりいただきまして、ありがとうございます。実はこの講演会ですが、ご存じのように、留学生センターのほうで昨年度、自己点検評価というのを行いまして、それに基づいて、外部評価という外部の先生方から評価をいただくという作業を、先週土曜日に行いました。実は井上先生もそのときにと考えていましたが、先生のご都合で、本日、その外部評価作業をしていただきました。そのうえにさらに今日、ご講演をお願いするということで、井上先生には遠路お運びいただきまして、まことにありがとうございます。

さて、ご存じのように、我が国の留学生受け入れ 10 万人構想が達成されたということで、今後留学生交流について、量から質への転換ということが図られなければならないということが言われています。本学におきましても、三百数十名の留学生が毎年在学するわけですが、一番大きな問題は土曜日の全体報告会でも話がありましたように、外国から受け入れた留学生と日本人学生との日常的な交流をどうやっていくかということです。我が国の各大学が抱えている問題であろうかと思いますが、これについて真剣に考えていかなければならないということです。

土曜日にいろいろご指摘を受けまして、厳しい指摘もありました。しかし、私はこの数年間この仕事をさせていただいていますが、留学生センターの施設設備に関しましては、決してネグレクトしてきたわけではなく、やるべきことはやってきています。ずいぶん前に総合教育棟の利用計画を立てるよう指示しまして、確かめましたら、すでに留学生センターをはじめとして、外国語教育・研究センターについても、総合教育棟の部屋割に至るまで案が全部できています。そういうことがこの前の土曜日の評価の際に、果たしてきちんと説明されたのかという点では、私は心もとない気がします。

いずれにしても、本日チャールズ先生にご講演いただくのは「協定校から見た留学生教育・交流のあり方」ということで、タフツ大と本学とは、いろいろな協定校がある中で、最も強い絆で結ばれている大学だと心得ています。

さらに先生は、泉鏡花の研究者としても名の高い方です。午前中も懇談しましたが、金沢城の裏手に白鳥路という小さな小路がありますが、その入り口には前田利家の像が立っています。しばらく行きますと、室生犀星と泉鏡花と徳田秋声の三文豪像というのがあります。これからの季節は、私はあそこを通ると気のある気がするのです。雪が降ると、3人の文豪が雪にうもれて寒そうにしていまして、私は時々手で雪払いをします（笑）。「お気の毒ですね。お亡くなりになられてからもこんなところに立たされるなんて、まことにお気の毒です」と言って雪を払ってくるのです。夏場は木陰がありますから立つのはいいのですが、冬場はお気の毒です。あれは何とか冬場ぐらひは移せないものかと、そんな気持ちで時々あそこを通ります。

よく見ますと、室生犀星は今は眼鏡が付いていません。最初は眼鏡を付けていたのです。そうしたら、いつの日かその眼鏡が消えています。理由を聞いてみたら、酔っ払いが眼鏡を取ってしまったらしいのです（笑）。実は今も眼鏡がないのです。つまり犀星は眼鏡をかけるときとかけないときがありまして、なくてもよからう、付けるとまた酔っ払いが取るだろうということで、今は付いていません。

いずれにしても、私は文豪と呼ばれるような人が立たされるというのはいかがか、犀川べりにある室生犀星碑、記念碑のような、そういう碑だけにとどめたらどうかという笑い話を、朝から先生としたところです。あまり長くしゃべるのはいかがかと思しますので、井上先生のお話を拝聴したいと思います。どうぞよろしくお願いします。

（三浦） 畑副学長、ありがとうございました。それでは次に中山センター長から井上先生のご講演の経緯についての説明があります。センター長、お願いします。

（中山） 今日はお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。経緯も先程の畑副学長の説明でもありましたが、留学生センターの平成14年度自己点検評価を受けて、平成15年度に外部評価を実施するというので、国内で5人の先生にお願いをしました。やはり留学生センターというのは留学生交流がメインですから、ぜひとも海外の協定校・交流校にお願いをしたいということです。多量の資料をお送りして読んでいただい

たということで、大変な労力を井上先生におかけしまして、また遠路はるばる来ていただきまして、本当にありがとうございます。

特に、畑先生が言われましたように、井上先生には「協定校から見た留学生教育と交流のあり方」ということでお話をいただきますが、タフツ大とはかなり中身の濃い交流をしています。さらにプログラムの不備などにつきましても、井上先生が直接こちらに来られて、いろいろ要望を出されたり、また日本語のクラス編成等についても、タフツ大と打ち合わせをしながら見直しを行ってきたということで、非常に密接な関係を持っています。

私もちょっと在外研究で行ったときに、タフツ大を訪問させていただいて、そのヘッドや井上先生にもお会いして、いろいろ意見を交換しました。私がそこへ行った目的は、とにかく短期留学プログラムの科目を単位として認めてほしいということをお願いしました。

そういうことも踏まえまして、今日は非常に貴重な示唆に飛んだお話を聞けるのではないかと考えています。それではお願いします。

(三浦) それでは、チャールズ・井上先生について簡単にご紹介いたします。お手元にチャールズ井上先生のご経歴など書かれたものが渡っていると思います。先生は、今はタフツ大学の International Letters and Visual Studies の Co-director で、そして教授でいらっしゃいます。そのほかに先程、畑先生もおっしゃいましたが、泉鏡花の研究家としても知られていらっしゃいます。そして今年の春に、2003 年度 Japan-U S Friendship Commission Award という、大きな名誉ある賞を受賞なさいました。これはハワイ大学プレスから出版された翻訳書の『Japanese Gothic Tales by 泉鏡花』という著書があるのですが、その本を書かれたことで受賞されました。

井上先生、それでは「協定校から見た留学生教育・交流のあり方」という題でご講演をお願いします。

(井上) 井上チャールズです。まず自己紹介を簡単にさせていただきます。アメリカの日系3世ですが、おじいさんの代から向こうに行っています。もともとは太宰府の山の方からです。真珠湾のときに西海岸からワイオミング州の収容所に行き、それから西海岸に帰らずに、ユタ州の山の中で育ってきた者です。おじいさんと一緒に住んでいたので日本語を聞いたりしたのですが、大学を出てから日本語の勉強を始めたので、まだちょっと日

本語が分からないところがありますが、今日はよろしくお願いします。

説明していただいたように、泉鏡花の研究で金沢に初めて来ました。それはもう 20 年前の話で、何回金沢に来ているか分からないくらいです。いろいろ泉鏡花のおかげで、金沢大学との関係ができて、うちの大学が留学のプログラムを考えたときに、金沢というところに作ってみたいという希望がありました。

うちの大学はタフツ (TUFTS) 大学です。「ジャンボ」という言葉があります。ジャンボというのは大きいという意味です。ジャンボは象の名前でした。ジャンボ・エレファントという象がいました。ジャンボを飼っていた人がタフツ大学にお金を出して作ったのです。バーナムアンドベイリーサーカス (Barnum and Bailey Circus) のことです。タフツのシンボルは象です。タフツジャンボといいます。ジャンボという言葉はでかいという意味ですが、今だれでも使うようになってきました。

タフツ大学は国際的な大学です。5,000 人の学生の 3 割くらいは英語以外の言語を母国語にしています。3 年生になると、学生の約 40% が留学をします。外国語をまじめに勉強しなければ卒業できないようになっていきますし、日本語、中国語、ロシア語、ドイツ語、ヘブライ語、アラビア語、スワヒリ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ヒンズー語などの習得を基盤にしている国際関係学 (International Relations) という専攻がありますが、この専門は有名で、アメリカで一番優れていると認められています。IR を専攻している学生が大体 400 人ぐらいいます。

留学生プログラムは 7 つあります。Tufts in Japan はその一つです。日本語のプログラムは大体 1980 年ごろに設立されて、Tufts in Japan は 10 年前からです。毎年約 10 人ほどが日本に来て勉強をしますが、その半分ぐらいは金沢に来ます。タフツの日本での留学プログラムを設立しようとしていたころ、金沢大学以外のところも検討しました。京都や東京などいろいろ回ってきましたが、結局、金沢大学にしました。その理由はいくつかあります。

まず、留学プログラムがすでに多く存在しているところを避けたいと思いました。そして勉強にいい環境を求めました。面白く、住みやすく、文化的基準の高いところがいい。古いものも新しいものもある町が好ましい。言ってみれば、ボストンのような町を探しました。

泉鏡花の研究家でもある私にとって、金沢はゆかりのある町です。何度も訪問したことがあります。家族で滞在したこともあります。日本の留学プログラムを作るときに、ぜひ

金沢にしたかったのですが、町はよくても、その町にある大学がプログラムの必要条件に合うかどうかは、また別問題です。何年間も検討した結果、タフツ大学と金沢大学が協定を結ぶようになりました。ご存じのとおり、パートナーになりましたが、金沢大学の留学生センターを評価するにあたって、私たちの感謝の気持ちをまず述べたいと思います。パートナーとして、私たちがお互いに頑張り合ってきたのですが、よくやったなと思わないではられません。

国際的な交流は決して簡単なものではありません。特に、教育の面においては、文化的な違いが多く、それを何とか乗り越えるには、非常な努力と忍耐が必要だと思います。これから努力しようという意図から、今までの問題点を挙げつつ考えてみたいと思います。

かなり具体的な話です。まず英語で言うと、resident director の問題について話をします。うちの大学は、留学プログラムが多いのですが、いずれも質の高いもので、アメリカではよく知られています。その理由は何といても、外国の勉強先にタフツが雇った学生の世話をする人がいるということです。金沢ではこのディレクターは松田園子という方ですが、何年間もお世話になっています。学生たちはみんな松田さんのことを「Tufts in Japan の宝物」だと言っています。

タフツの学費はとても高いです。そのため留学する際、タフツの留学プログラムより安いプログラムを学生が選択する可能性があるので、原則として、ほかのプログラムより自分のものを優れたものにしなければなりません。協定校が設けている学生センターの質は国によってかなり違います。ほとんど何もないところもあれば、金沢のような立派なセンターもあります。外国人をよく世話する日本人の意識が表れているわけでしょうが、タフツ専任の人を雇わなければならないことは、センターの方々にとっては理解しにくいことかもしれません。そのため、松田さんの仕事とセンターの仕事をできるだけはっきり分けたほうがよいということで、彼女は日常的な助けはするけれども、学問的な勧告はしないということになっています。この妥協を納得したうえで、タフツと金沢大学が協定を結んだわけですが、それゆえ松田さんとセンターの方々が協力し合っていただき、生活の面と勉強の面の総合的な関係を相談する機会があればよいと思います。

第2点としては、金沢大学の日本語教育法とタフツのそれとはかなり違っているように思います。どちらがいいというわけではなく、まず使う教科書が違います。文法の説明のしかたも違います。試験の回数とフォーカスもかなり違います。そのため、学生が困る場合もあります。優秀な学生は、どの方法でも日本語を問題なく学ぶけれども、そうでな

い学生は、慣れていないものには耐えられないということもあります。漢字になじんでいる留学生と、そうでない学生もいます。韓国語を知っているから、日本語の文法が分かりやすいという学生もいます。こういう学生を同じクラスに入れて、同じ教授法を利用すると、いい結果が出るかどうかは疑わしい。とはいえ、それぞれの文化に合ったクラスを作るのも大変なことです。この点においても、これから解決できる可能性があるけれども、そのためには先生方の交流の道を開かなければなりません。

第3点は、こちらの要求が多いように思われるかもしれませんが、国際交流をするには、どうしても従来のやり方では対応しきれない傾向があります。必要に応じて、私の教育の原理や方法も変化していきます。例えばアメリカでは、高校で日本語を勉強する学生がだんだん増えているにもかかわらず、日本語で講義を聞ける学生はまだ少ない。そのためKUSEPが生まれました。この点もありがたく思っています。しかし学生に聞くと、先生によって英語の力が一貫していないそうです。これはしかたがない問題です。昔から日本人の外国語の受容は音より形と意味を重んじた結果、話す力が読み書きの力に比べて劣るわけです。しかし、これも人材の交流によって改善できる点でもあります。将来、協定校同士の先生方の交流をさせる道も考えたらどうかと思います。

第4点は、組織の違いが問題になるケースが多い。例えば、日本では学校は4月から始まります。アメリカでは9月からです。夏の間休む国もあれば、休まない国もあります。金沢大学の暦が多少このずれに合わせるようになったこともありがたいと思います。おそらく中でも一番大きな問題は受け入れのタイミングでしょう。金沢に行きたい学生は、2月に申込書を出します。しかし自分が受け入れられるかどうか分からない。ほかの留学プログラムのほうが早めにわかるので、金沢からの返事を待たずに違うところに行ってしまいます。ある年は、9人も金沢に行くことを希望していましたけれども、結局2人しかいなかったのです。しかも、その2人は最も優秀な学生ではありませんでした。

これについてセンターの皆様にご相談したところ、金沢大学は国立大学ですから、官僚主義的なところがあると言われました。新しいことをやるのが難しく、問題が出てきたときの対応が鈍い。その反面、安定性があって、何かをやるときに中途半端なことをやらない。何回か金沢に足を運んでこの問題を解決することができました。受け入れるタイミングと人数と奨学金のことも、かなりよい条件にいただきました。やはり日本の国際化が進むにつれて、柔軟性を持つ大切さがよく分かりました。

このように、問題点ばかり出してはいい評価になりませんので、留学生センターの長所もいくつか挙げてみたいと思います（笑）。概していえば、短期間でセンターがかなり有効な組織になっていると思います。多面的で需要に応じて発展しています。有能なスタッフがそろっており、一生懸命に仕事をしておられます。

私の一番感心しているところは、センターのスタッフが留学生を実際に教えていることです。やはり大学においては、事務員と教員を別々に考えてはいけません。いい会社にも同じことがいえます。アメリカでの欠点は、大学であろうと会社であろうと、管理職が仕事の現場から離れてしまう場合が多すぎるということです。金沢大学留学生センターのサービス精神はすばらしいものだと思います。個人的なレベルはともかく、組織的なレベルでは、金沢大学はタフツ大学より充実したものと言わなければなりません。情報機関が豊富で、学生の満足感が高い。これからはいろいろな問題が出てくるでしょうけれども、この歴史のある豊かな金沢が、世界中の留学生が集まるメッカになることを望んでいます。そこまで発展する可能性があるとは私は信じています。

昨日、学生に会って、いろいろ質問をしました。その結果を簡単に述べたいと思います。まず学生は、この留学生センターは住宅問題、クラスの登録、何か個人的な問題でもそのときに必ずセンターの皆様が助けてくださると言いました。“Well organized”とか“Helpful”とかありまして、一般的な評価はかなり高いと私は聞きました。

住宅問題ですが、問題点の一つは学生が会館にいて、英語圏の学生が英語でしゃべったり、中国圏の学生が中国語でしゃべったりします。当然のことでしょうが、日本語を学ぶにはこれはあまりよい条件ではありません。ですから、学生たちは、もっと日本人に留学生会館に居てもらいたいということを提案しました。今、日本人はいることはいますが、まだまだ足りないということで、授業のときも、やはり日本人と接する機会が少ないようです。KUSEPの授業もできて、日本の学生が出ているKUSEPの授業もありますが、学生はそちらのほうを高く評価しています。

最後に暖房の問題です。これは特にアメリカの学生はどこへ行っても暖かいことを期待するのですが、それはしょうがないと思います（笑）。

そして、クラブ活動です。学生によって、クラブ活動に積極的に出ている人もいれば、そうでない人もいます。うちのボウさんは、「クラブ活動をしないかぎり、全然日本の友達ができないぞ」と言われ、彼は頑張って友達ができました。昨日の話で、クラブに出て頑張っても、その中に入れてくれないので辞めるという学生が3~4人いました。バスケット

ボールのクラブに入ろうとしていた学生もいました。日本人にも負けないぐらいバスケットはできるけれども、ドリブルの説明を日本語でやるしかないので、コーチから「面倒くさいから、君たちは辞めたほうがいい」と言われたそうです（笑）。

私自身、こちらが頑張らないと日本の友達ができないというのは当然のことで、いつもタフツの学生には絶対クラブに入らなければいけないということを言っています。昨日も面白いことに、留学生が日本人の友達を作れないということについて話したときに、日本人同士でもあまり友達にならないことがあるそうで、これはもう少し検討する必要があるかもしれません。

チューターの件ですが、私が聞いたところによりますと、学生のクラブで「KISS」と「友達」というクラブを通して決めるわけですが、チューターによっては、素晴らしい体験をしている留学生もいれば、全然役に立たないという学生もいました。ある学生は、「私のチューターは恥ずかしがってものを言ってくれない」と言っていたり、また、一方では、「毎日のように会って話をして何でも打ち明けて、問題でもいろいろカウンセリングをしてくれる」というチューターもいるそうです。

同じことですが、ホストファミリーの件についても話しました。ホストファミリーはみんなすごくいい体験だと言いました。今年の秋に金沢に来て1回だけ日本人の日常生活を自分の目で見たことがあり、それを非常に感謝するけれども、もう少しそういう機会を作ればよいと提案しました。うちのボウさんも、だれかのおかげでホームステイはできたそうで、私にそれは非常に貴重な体験だったと言っています。大学生ですから、同じところでずっとホームステイしたいという人はほとんどいません。ということは、自分の自由が欲しい、小学生扱いされたくない、門限など守りたくない、ということですが、時々行ってもいいなと言います。家族の中に入って、日本の家というものを理解するには、非常に大切な体験だとみんな言っていました。

授業のことですが、KUSEPは本当にありがたいものだと言っていました。問題は、英語でやるということですが、韓国や中国の学生は必ずしも英語が達者というわけではなく、困る学生もいるようです。しかし、全然ないよりいいとみんな賛成していましたし、素晴らしいコースもあるということは言っていました。岡沢先生が教える金沢の紹介というコースは評判が高く、それによって金沢という町を知ることができましたし、日本人学生が出てもいいというKUSEPのコースも、高く評価されています。それはなぜかというと、日本人を知ることができるからです。

日本語のクラスですが、いろいろ話を聞きました。学生によって、成績を心配する学生もいれば、そうではない学生もいます。授業に出なくていいという学生もいますが、タフツの学生にとってはタフツの正式なプログラムですから、ここでの成績がそのままタフツの成績に換算されるのです。金沢大学でBをもらおうとタフツでもBになります。AはAで、CはCで、DはDです。Dをもらう人も時々います。学生のモチベーションはそれぞれですが、昨日話を聞いたときに、「日本語C」とか「日本語D」とか上級のクラスの方が勉強する動機が強いとか言っています。「日本語A」は出席しない学生もいると言っています。何か誤解している気がしたのですが、つまり「日本語A」のクラスに出る学生はさまざまで、研究する学生も行くはずですが、行かない人が多いと言っていました。これはあとで話し合しましょう。

そして、先ほどスタッフと話し合った問題ですが、教え方が違うということです。どう違うかということ、学生に言わせると、先生と学生の関係が国によって違うわけで、例えばアメリカでは、講義をするときに途中で学生が手を挙げて質問をします。「先生、そんなことないでしょう」とか言います。現在、ストレートに講義するアメリカの教授はほとんどいないのです。すると退屈でしょうがないという評判ができて、授業に来なくなるのです。先生が学生のニーズに応じて、自分の今日やることが変わったりするケースが多いわけです。昨日、留学生と話し合った時、何かを質問するときに先生方がそれを無視する傾向があるそうです。でもよく分かるのですよ（笑）。うるさい学生もいますし。

私はうちの学生に、「教え方が違うということは文化が違うということであり、違う文化に接することは留学生経験で欠かせないことの一つである」とよく言うのですが、そういう点を取り上げられました。

提案としては、まずKUSEPの授業に日本人を多く入れること。第2に、それから日本人の学生とつきあって友達になる道を開くこと。これは絶対必要だと学生がみんな言っていました。ところが、私が、「では日本人の友達のいる人、手を挙げてください」と聞いたら、だれも手を挙げなかったのです。第3は、京都に行って京都の案内をしてもらってよかった、しかし金沢はまだ分からないという学生がいました。ですから、みんな一緒に金沢の紹介のツアーを見物の形でしたほうが、オリエンテーションとしていいのではないかという提案でした。

第4点は、クラブ活動の情報を、A組の人たちのために英訳してもらいたいということです。クラブ活動があっても何をしたら入れるか、参加できるか分からない人が多いので

す。要するに、量の問題だけではなく質の問題と副学長がおっしゃいましたが、まさに組織の形はできているわけですが、これからは留学生だけではなく、金沢大学の学生全体の教育を考えなくてはならないという時代です。うちの学生たちをうまく利用して、金沢大学の教育をもう少し豊かな国際化されたものにすればよいと思います。

そして、学生だけではなく、先生、教官、ティーチングスタッフなどを交換した方がよいと思います。これはできないことではないので、これからやってみたいと思います。以上です（拍手）。

（三浦） 井上先生、ありがとうございます。金沢大学の国際教育の改善について、示唆に富む講演だったと思います。時間はまだだいぶあるのですが、これから質疑応答に移りたいと思います。

先生がご提案なされたことは、大きく別けて問題が三つあると思います。一つは、組織的、システムのなこと。もう一つは、主にKUSEPの学生がタフツ大学から来ているわけですが、日本語の授業と英語で行われる専門の授業のこと。もう一つは、日本人学生との共学および日本人学生との交流、友達になるという点だったと思います。

組織・システムのなこと、特に resident director の問題などは先ほど先生ともヒアリングでかなりお話ししたのですが、そのことについてどなたかご質問などありませんか。

松田園子さんがいらしています。どうもいつもありがとうございます。何かご意見は、おありでしょうか。

（松田） とてもよくしていただいています。ありがたいと思っています。何かあるといつもご連絡いただいていますし、到着のときもご連絡いただいています。お迎えのときなど深夜なのに、皆様よく温かく迎えてくださっていると思います。一番心配なのは病気などですが、それもきちんとご連絡いただいたり、わざわざ付いていただいています。私としてはずいぶんよく連絡していただいていると思っています。

（三浦） ほかに何かございませんか。

では、授業のことですが、日本語の授業については、先ほどのヒアリングのときに井上先生にこちらからいろいろご説明しました。先生もいろいろご質問なさって、先生と私たちの間ではかなり分かったのですが、何か皆様おっしゃりたいことはありませんか。

(長野) 先ほど日本語の授業の中で、学生が質問してもそれが無視されることがあるとありました(笑)。ぜひ実態を知りたいし、こちらからご説明する必要もあると思います。これは個々でいろいろなケースがあるので、一概にこうだというのは非常に難しいです。学生によっても違いますし、クラスの教師によっても違いますので、一般的にこうだというのは非常に難しいと思いますが、私が思いますに、日本語教師は決して質問を無視しているのではないと思います。やはりその時間に教えなければならないこととか予定がいろいろありますので、一人の学生のある質問にあまりにも長い時間をかけるわけにはいけないというのは教師の側の事情ですが、そういうこともあるのではないかと思います。また、教師と学生との人間関係が失われているということではないと思います。

しかしながら、そういうことすべて考慮しても、学生に教師が自分の質問が無視されたと思わせてしまったら、それはやはり教育の失敗だと思います。その点は我々教師としていろいろ考えて工夫していかなければならないなと思ってお聞きしました。今伺ったことは、日本語を担当しているすべての教師に伝えまして、一緒に解決策を考えていきたいと思います。

ここに非常勤の先生が何人かいらしていますので、もし現場にいる方で何かおっしゃりたいことがあったら言ってください。

(井上) 大体、日本語のコースは非常に高く評価していました。一人だけが問題を提出したのです。

(三浦) 質問しても無視されるということを、私もほかの学生から聞いたことがあります。その点については、留学生センターの日本語の専任、非常勤全部そろったときにいろいろと話してみます。これはかなり話し合わなければならない問題ではないかと思います。文化の違いということもあります。それから授業のシステム・教授法の違いということもあります。かなり根本的な日本語の授業のあり方とかかわりあっていると思いますので、これから話し合っていきたいと思います。

(井上) とにかくついていけない学生に、先生と授業ではない時間に話す場を作ったほうがよいと思います。

(三浦) 授業以外に、授業のあとで話すとか、先生のところに来ていろいろ質問をする時間を取るということですね。そうするとオフィスアワーの時間を作ることになり、そうになると私たち留学生センターの者はいつも忙しくしているわけですが、さらにその時間を取らなければならないということになって、難しい問題になるのですが、それも話し合っ
て、どうにかしていきたいと思います。いかがでしょうか。それではまたあとで時間が余りましたら話すことにします。

次は英語による専門授業の事です。英語の授業のことについて何かご質問なり、ご意見なりおありの方はどうぞ。

(井上) うちではわざわざ留学生のために、このようなプログラムを作ることはまずないです。日本語で何か授業をやる必要もないかもしれないけれども、必要があってもやるかどうかは分かりません。中国で杭州というところで、留学生プログラムを作りました。中国語も日本語と同じようなもので、高校で教えないし難しい言葉なので、中国語の講義を聴いて分かる学生が少ない。やはり、浙江大学で同じく英語の授業を作っていただきました。スペインやパリなどでは、英語ではなく、スペイン語とかフランス語で授業をやっています。

(三浦) そうすると英語の授業があるのは、日本と中国ですか。

(井上) それだけです。

(三浦) それはやはり言語が難しいということと関係があるかもしれませんね。スペイン語やフランス語は比較的ついていけるのでしょうか。

(斉木) 中国の大学の先生方は英語で教えていらっしゃるからお聞きしましたが、英語力といたしましょうか。どちらが上手でしょうか。

(井上) 似たようなものです(笑)。はっきり言って、浙江大学に行って交渉したときに、英語で授業をやっていただけますかと聞いたときに、問題なく「できます」とすぐ言って

くれました。したいという先生もすぐ出てきました。しかし、それを教える授業の質はそれほど高いものではありませんでした。容易にできるものではありません。解決する問題ではないのです。どちらかというと、今のところで日本より中国のほうが先生や大学院生をアメリカに行かせているところです。斉木さんはスタンフォードで勉強したけれども、ちょっと例外的な存在です。今、中国では、アメリカで勉強した教授はかなりいます。明治時代はよかったですね（笑）。

（三浦） 英語による専門教育のことについても、先ほどのヒアリングのときに私たちセンターのスタッフと先生とでお話したのですが、その中で言っていたことは、KUSEPの英語による専門教育は、英語がおできになる先生方に頼って、そういう先生方をお願いして講義をしていただいているという現状です。すぐにできることとして、例えば、在外研究にいらした先生方、在外研究の経験者にKUSEP授業を義務づけるとか、そういうことができたかなと思います。また、学内で英語による専門授業の教え方のトレーニング、先生方が英語で授業をすることは、日本語で授業することとちょっと違いますので、内容は別として、教える方法のトレーニングを先生方が受けてくだされば非常によいのではないのでしょうか。

あとは、例えばスタンフォードでは、英語を母語としない大学院生の一部には、将来いろいろな意味で教える立場に立つ人たちがいますし、また学位を取得するための条件の一つをクリアする目的で、自分の専門を英語で教えることのトレーニングの授業があるそうです。そういう授業が大学院生の卒業単位の一つなどになったら、また例えば、私たちがそういうトレーニングの機会を提供することで、ずいぶん金沢大学も国際化されるのではないのでしょうか。

（井上） アメリカの大学で授業をやっている人が多いけれども、面白くない授業はあります。高校の先生や中学校の先生は教え方をきちんと習うわけですが、大学の先生はしないのです。ですから、僕などは文学の研究をいろいろ習いましたが、授業のやり方は全然習いませんでした。それはアメリカの大学でも普通です。各大学においては、センターがそのためにあるのです。

（三浦） ほかにこのことについて何かご意見はありますか。

それでは、日本人学生との共学、あるいは日本人学生との交流についてご意見をお願いします。

(宮崎) 意見といいますか、井上先生に質問があるのですが、先ほどのまとめで、金沢大学の日本人学生の国際化を留学生を使ってしてはどうかという提案がありまして、大変面白いと思いました。そこで質問ですが、タフツ大学は3割が留学生であり、3年生になると学生の40%が留学するという環境なので、学生は外国人との交流が自然に行われているかもしれませんが、もし大学で政策的にタフツのアメリカ人学生と外国人学生の交流について、政策的にこうしたらどうかと進めていることがあったら、教えていただきたいと思います。

(井上) 実はあちこちから学生が来ているのですが、日本の学生も50人ぐらいはいます。その50人は大体 Canadian Academy とか American School とか International School とかそういうところに行っていた人たちです。小さいときに両親が派遣されてアメリカでずっと何年間か住んでいた人たちです。ギリシャの人も多いし、中国、香港、シンガポールからの学生などもあります。みんながタフツに行って、お互いに学び合っているわけではないのです。ですから、交際する機会を大学のほうから作らなければならないという意識を持っています。Diversity という言葉がありますが、いろいろな人が来て一緒に勉強する、それは大学では非常に高く評価されています。しかし、Diversity があっても、それが自分の学生生活を豊かなものになっているかどうかはまた別問題で、プログラミングがなければなりません。

タフツ大学でもこれからもっと交際するように、いろいろなプログラムを作ると思います。作らないと自然にならないと思います。

(宮崎) Diversity (多様性) はあっても、同じグループで固まっていたら、あまり交際していないということだと言えます。今どんなプログラムがあるか教えてください。

(井上) 例えば、3年生になるといろいろな国に行き、それが終わって4年生のときにタフツに戻ってきます。例えば、日本でずっと1年間勉強した人がまたタフツに戻ったら、何か変に文化的な adjustment ができないわけです。Reverse Cultural Shock という

ます。逆に帰ったほうが大変で、来るときも大変でしょうが、帰ったときのほうが大きな問題です。うちは、帰ってきたよという会を作らなければならないという計画をしています。みんな集まって外国で何を習ったかを発表させるわけです。発表する場を与えないと、帰っても adjust しないのです。日本で何をしてきたのか分からないという学生もいます。ですから、私は金沢でこういう体験があり、これを習いました。それを自分で言って、これから日本に行く学生に、それをオリエンテーションとして言ってもらおうという計画を立てています。それは一つのやり方です。

(三浦) それは大変いいと思います。金沢大学から協定校に派遣した学生が戻ってきて、何か発表をしているのでしょうか。

(八重澤) その年度で。去年はそうしたことがありましたし、オリエンテーションのときには海外派遣の説明をします。オリエンテーションのときに、帰国した人たちの体験談という形で話をしてもらいます。

(井上) りょうすけ君は話しましたか？ 2年間うちの大学にいた人ですが。

(八重澤) 今年はドイツと中国と。また、先ほどご覧になった留学フェアもあります。そのときに協定校のブースに帰国した日本人学生がいて、後輩に勧めて、留学の情報を得たという学生はいます。

(井上) 統計を見ると、金沢大学から行く学生はまだ少ないです。

(八重澤) 来てくれる学生たちと比べると、3分の1ぐらいです。

(井上) 行きたいところとのバランスが取れていません。中国から多く来る。中国に行く学生が少ない。フランスに行く学生が多いけれども、フランスから来る学生が少ない。面白くないでしょう。

(三浦) そのアンバランスの問題がありますが、行きたいと言わないのに、無理にその

国へ行かせるわけにはいかないという問題があります。これから重点交流校を決めていきますので、その辺で何か考えていかなければならないと思います。

(八重澤) 検討の余地を残した問題でしょうね。とにかく、外に出す学生を増やしたいというのが今の段階です。ですから、もう少したつと、バランスを考えることができるようになると思いますが、外に出すことの問題については、センターというよりは各学部で、例えば単位互換をきちんとするとか、そうした協力がどうしても必要になってきます。全学の体制とも極めて関係が深くなってきます。また、先発校である大事なタフツ大学からいろいろなアドバイスをいただけたらと私たちは思っています。

(井上) 工学部ですが、アメリカではエイベットという組織があります。エイベットが工学を勉強する学生の必修科目を全部決めてしまうのです。ですから余裕がないということです。外国語を勉強したくてもできない、外国へ行きたくても行けないという状態です。おっしゃるとおり、各学科が単位を認めるかどうか、そして、そのコース課程が1年間休学するような余裕があるかどうかという問題を考えなければなりません。

(三浦) これは留学生センターだけの問題ではなく、学部、それから大学全体の問題かもしれないですね。

(井上) アメリカでは国際化しなくてよい大学はないのです。国際化していないところへは行かない。うちのお客様は世界中の優秀な高校生です。よい人をとるのです。どこでも。日本人であろうと、ロシア人であろうと一番才能のある人たちを認めて、うちに来るようにするのです。ですから、日本の学校もそうなるかもしれないですね。

(三浦) 本当にそうしたいと思います。タフツ大学はそのようなよいシステムをお持ちで、また留学の派遣の受け入れも、派遣のほうもとてもよい留学プログラムをお持ちなので、本当にいろいろと教えていただきたいと思います。これからもコンタクトを取り合って、留学生センターだけではなく、大学関係としてもお願いしたいと思います。

それではほかに日本人との共学あるいは友達関係、クラブ、ホームステイなどについて何かご意見はありますか。

それではご自由にいろいろな質問をどうぞなさってください。

(中山) 先ほどのお話にも関係するのですが、国際化されていない大学はうんぬんという話がありました。大学の国際化とは何かということで考えてみると、留学生を受け入れて教育すること、自分の大学の学生を海外へ派遣していろいろなことを学ばせること、そして、その交流もあると思います。もう一つは、そういう国際理解、異文化理解の授業科目を充実させて、自分の大学の学生もそれを履修し、留学生もそれを取り、交流の中で世界を理解する。いろいろな文化や習慣が、いろいろあると思いますが、いろいろな形で世界を学び、理解するための授業科目を充実させる。それは言語に関係なく履修できることも大事だと思います。そういう科目が英語で受けられるとか、完全な英語ではなくても、日本語が十分ではない学生でもきちんと英語によるサポートがあって十分に理解ができることも必要だと思います。

金沢大学には外国語教育研究センターがあり、言語関係を教えている先生が集まっています。例えば、留学生センターとそういうところが協力をして、全学的に国際化教育、すなわち、単に学生を送る、受け入れるだけではなくて、自分の大学でそういうカリキュラムを充実させていくことが大切だと思います。常に言語の授業があるようにします。経済学部や文学部での授業のなかに世界、国際化教育に関連しているものがあると思います。それらを、一か所に集めるというよりは、むしろ総合大学のいろいろなところにある授業がネットワーク化して、それをうまくカリキュラム体系の中に組み込むことによって、国際化教育を行うことができると思います。

(井上) うちのIR (International Relations) は、アメリカで一番よいと評価されています。タフツではIRの学科がないのです。IRというのは Interdisciplinary Major ということで、いろいろな学科と関係のある授業がグループとしてあるわけです。ある言語を取得したうえで、経済とか理論とか、その国、日本の歴史を専門的にやるという学生がいるけれども、いろいろな学科からの授業を取るわけです。しかし、IRの学科はないです。Interdisciplinary Major ということです。これからこれも増えていくようです。

(中山) どうしても学部とか学科というのは、学部レベルですぐに変わるのはなかなか難しいので、そういう科目を全部集めて一つの学部を作るとするのは非常に難しいと思い

ます。

(井上) これは言うてはいけないことかもしれませんが、僕もディーンだったのですが、Interdisciplinary Major を作ることは流行なのですが、大学にとってこれは安い方法の一つです。新しい学科を作るというより、すでにあるものから適当につくろうという、パッケージの問題です。少々変えるだけで違うプログラムが出来上がるから安いです。

(中山) ただ、それもばらばらのものをとるというよりも、やはり一つのカリキュラム体系として、大学としてそれを保証する以上は、科目間の連携をするとか、それに関連ある先生方がお互いに意見を出し合って、一つのカリキュラム体系としてある分野の卒業証書を出すというだけの質、クオリティを保証しなければなりません。そういう意味でのネットワーク化という意味です。

(井上) うちのマイヤールという学長が作ったものです。学長が作らないと、成り立たないです。ということは、常にそれぞれの学科の伝統があつて、私たちはこういう勉強をするとか、こういう授業をやるとか言います。上の方は、これから国際化しなければならないので、こういう I R を作ると学長のほうから言い出したわけです。そしてお金を借りて実現しました。

(中山) 学長をその気にさせる努力を我々はしなければならない。

(三浦) 斉木先生どうぞ。

(斉木) 大学が国際化するためには、学生も教官も意識を少し変えなければならないということだと思います。また学生の教育ということで、異文化コミュニケーションとか、いろいろそれについて知るとか、そういう体験を学生にさせるための授業が必要だというご意見ですが、それは国際化するまでのプロセスで私たちにできることで、それをしなくてもよい状態が、国際化した状態だと私は思います。

私の経験では、スタンフォード大学でもカリフォルニア大学バークレー校でも、何々人学生対留学生という対立は全くなかったです。

(中山) 私が言ったのは、それをなくすという意味です。

特別プログラムが、ある意味ではどうしても生まれてしまうから、全学の正規科目として設定するわけです。私が言っていたのは、それを集めて一つの学部を作るのはなかなかできるものではない。できないからやらないのか。今もそれに関連する科目があるし、足りなければそれを教養科目でも何でも設定すればよいのです。卒業証書を出すため、学位を出すためのものとするためには、やはりネットワーク化する必要があると思います。

経済学部において経済の勉強はやったけれども、もう少しアメリカの経済が、あるいは世界的な経済について学びたいときに、そういう科目が設けられていれば、経済学部の学生にとっては幅を持たせることができます。別の見方からすると、同じ科目でも、国際化教育のカリキュラムの中に位置づけられるともいえます。

(三浦) そうですね。最終目標として、留学生と日本人学生の隔たりがなくて、みんなと一緒に勉強できるという大学が望ましいですね。

(中山) 専門分野の体系化という話。それは同時に特別プログラムよりは、そういう体系化づけるということは、そこには日本人も留学生も全部入ってくることになります。

(松田) タフツ大学から時々パンフレットを送っていただくのですが、タフツ大学にはサマーセミナーがあります。プログラムを見るかぎりでは、とてもいいプログラムができていまして、4週間と6週間があり、4週間で費用が33万円ぐらいになって、大変いいプログラムです。6週間になると特に何点以上というのがあるのですが。私は常々思っているのですが、学生が第一歩としてちょっとそこに行くのは、大変いいことだと思います。せめて金沢大学でも頑張って受けてもらいたいの、タフツのほうで金沢大学の学生は半額と(笑)。そういうことをちょっと考えていただけたら。

(井上) それはできないことではないです。ということは、大学というものは、Expenseが高いので、収入をいろいろな形で得る必要があります。ですから、夏の間は教室は使われていないので、それをプログラムに貸して、日本人を呼んで、そこで授業をやればよいということです。簡単な経済的な話ですが。

(三浦) 少し安くしていただけるとすれば、日本人学生が短期間でこちらからそちらに行って、アメリカの生活と言葉を習ってくることは、素晴らしい体験だと思います。これは過渡期にはやらなければならないことです。

もう一かたどうぞ。

(遠藤) 私は今、共同研究センターで産学官連携のコーディネーターをしている者です。実は3年ほど前に、こちらの大学院の社会人学生として勉強したことがあります。先ほどからお話を聞いていて感じたのは、学生の質問に対して先生が十分に答えてくれないという事で思い起こすのは、やはり全部の先生ではないと思いますが、金沢大学は特に学部の授業を私も受けたりしたのですが、先生のほうからの一方的な、一方通行の講義が多いという感じがしました。

実は私も30年前、もうだいぶ昔ですが、スタンフォードに2年間、修士エンジニアリング・ステューデントで行っていたのです。そのときは学生から一つ質問が出ると、それに対して先生が今度別の学生にどう思うとか、それがきっかけになって話が脱線していくとか、講義の決められたものから脱線してでもディスカッションが進んでいくという経験をしたように思います。そういう点で、だいぶ違うなということを感じました。

もう一つは、新しい授業が始まると、必ず最初にどの先生もスタンフォードの場合は、私のオフィスアワーは何曜日の何時から何時までと黒板に書いてくれまして、そのときはともかくドアを開けて待っているから、質問に来なさいということだったのです。そういうふうにすると、学生としては非常に行きやすかったということがありました。そういうことは、私は金沢大学で学生を3年間したのですが、お一人だけそういう先生がおられました。畠田先生といって、よく聞いてみると、ミシガン大学で教えられていたそうです。そういう何か文化の違いがあるのではないかなと思います。

そういう点で、オフィスアワーを作ったりするのは、何も留学生のためだけではなくて、日本の学生にもそれは非常に有効だと思います。そういうことを感じました。

(三浦) どうも貴重なご意見をありがとうございました。確かに、先生のドアが開かれているのと、いつも閉じられているのは、学生にとってかなり違いますね。

(中山) 今ですとシラバスにオフィスアワーを書くことになっています。書いたからやっているかという、これはまた別の問題ですが(笑)。オフィスアワーでやらなければならぬということにはなっています。

(三浦) それではもう3時になりました。どうしてもここで一言何か言いたいと思われ方はいらっしゃいませんか。それでは井上先生もう一言、最後によろしいですか。

(井上) 今の若い人は、自分はだれか、自分の才能は何であるかを考えないところがあるのです。例えば、今の傾向としては、専攻を三つもやるような学生が出てきました。なぜ三つもやらなくてはならないかという、自分が何をやりたいたかが分からないからです。結局、これとこれとこれをやっておけば何とかなかって仕事に就けるというような考え方をしています。僕はずっとディーンとして頑張って、君たちはあることを専門的に勉強すればいいです、エキスパートになればいいですよ、卒論は絶対に書かなければだめですよというアドバイスをしました。

それはなぜかという、自分というものが分からずに教養を得て、社会人になってしまえば、もう終わりではないですか。ですから、留学生問題もそうですが、もう少し今の若い人たちにまじめに自分の才能を生かして、何かに貢献したいという気持ちを持ってもらわなくてはなりません。これはアメリカの学生の状況ですが、日本の場合は分かりません。大体似たようなものではないかと思います。

(三浦) 最後に大変よいお話をありがとうございました。それでは井上先生の特別講演会をこれで終わらせていただきます(拍手)。

編集後記

このたび、金沢大学留学生センターは、1995年の省令化以来初めての外部評価を受けました。外部評価委員の先生方には、資料をお読みいただき、2003年12月6日に全体評価報告会、12月12日に米国協定校の委員の報告会を経て、評価報告書を出していただきました。たいへん貴重な評価とご意見を賜り、留学生センター一同の励みとなり反省となりました。

2004年4月から国立大学法人として生まれ変わる前にこの外部評価を経たことは、センターの足跡を振り返り、将来の展望をもつために、非常に有意義であったと思います。評価委員からの様々なご指摘を肝に銘じ、センターは具体的な改善へと進みはじめました。本報告書を広く関係者諸氏にお読みいただき、留学生教育の更なる発展のために活用していただければ幸いです。

平成16年3月

金沢大学留学生センター

三 浦 香 苗

編 集

外部評価実施ワーキンググループ

中 山 謙 二
三 浦 香 苗
斉 木 麻利子
留 学 生 課

金沢大学留学生センター
外部評価報告書
2004

平成16年3月26日 印刷

平成16年3月31日 発行

発行所 金沢大学留学生センター

〒920-1192 金沢市角間町

TEL (076)264-5188

FAX (076)234-4043

印刷所 前田印刷株式会社

〒924-0004 松任市旭丘2丁目16番地

TEL (076)274-2225



金沢大学留学生センター

920-1192 石川県金沢市角間町

<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp/>